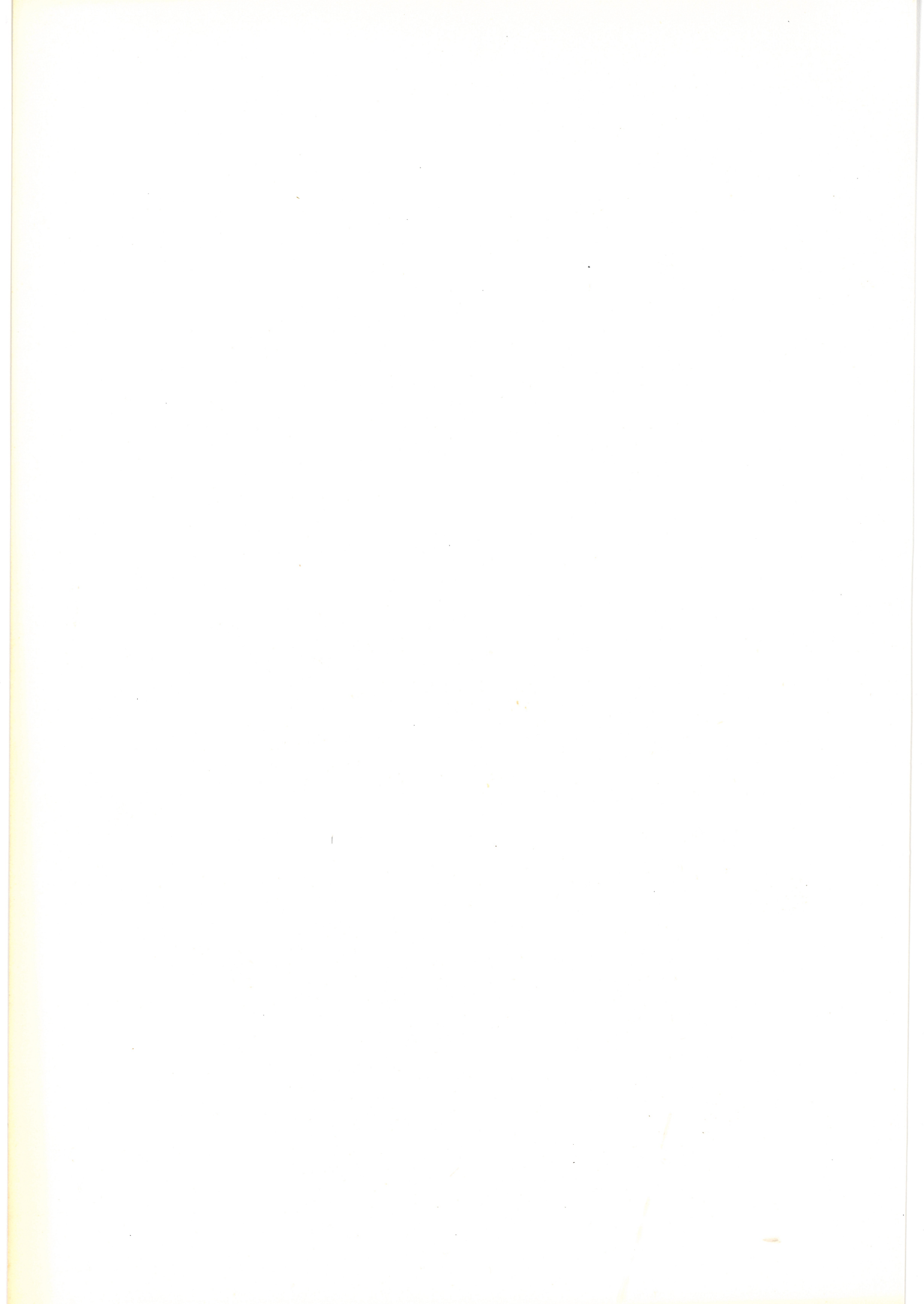


しん でん
新田横穴群 D 群

平成 8 年度畑地造成に伴う緊急発掘調査報告書

1 9 9 7

掛川市教育委員会



しん でん
新田横穴群 D 群

平成 8 年度畑地造成に伴う緊急発掘調査報告書

1 9 9 7

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成8年10月11日から平成9年2月15日まで実施した静岡県掛川市長谷1392-1に所在する新田横穴D群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、農地造成に伴う緊急発掘調査で、調査費の1/2を国、1/4を県の補助金を受け掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際し、土地所有者の高柳英夫氏（故人）、隣地の高柳清一氏、高柳貢氏、小島喜代司氏の各氏には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の戸塚和美が担当した。
5. 発掘作業ならびに整理作業では下記の方々に参加を得た。
横山正氏・木村治郎・梅津まさゑ・松浦富美江・松浦まさ子・鈴木辰江・長谷川幸子・松浦せい子
中村すま子・清水香代子・藪内光恵・児玉昌子・清光真由美・水野かおり
6. 現地調査ならびに本書作成にあたっては、下記の方々からご教示・ご協力を得た。
向坂鋼二・松井一明（順不同・敬称略）
7. 本書の執筆・編集は、戸塚和美が行った。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長小松弥生、社会教育課清水功、文化係長宮浦直巳のもと社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 挿図における方位は、磁北を示す。（1997年3月現在）
2. 本書で使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。
3. 遺物番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

例 言

凡 例

I	発掘調査と遺跡の概要	1
	1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
	2. 調査の方法と経過	2
	3. 遺跡をめぐる環境	3
	1) 地理的環境	3
	2) 歴史的環境	3
II	遺 構	6
	1. 横穴	8
	2. 竪穴住居 (カマド)	14
III	遺物	15
	1. 土器	15
	2. 鉄製品・装身具	19
IV	まとめ	21

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	1
第2図	遺跡の周辺地形図	5
第3図	遺構全体図	6
第4図	1号横穴実測図 (1)	7
第5図	1号横穴実測図 (2)	8
第6図	1号横穴実測図 (3)	9
第7図	2～4号横穴墓前域実測図 (1)	10
第8図	2～4号横穴墓前域実測図 (2)	11
第9図	2号横穴実測図	12
第10図	3号横穴実測図	13
第11図	4号横穴実測図	14
第12図	5号横穴実測図	15
第13図	Aトレンチ土層断面図・カマド実測図	16
第14図	出土遺物実測図 (1)	17
第15図	出土遺物実測図 (2)	18
第16図	出土遺物実測図 (3)	20
第17図	出土遺物実測図 (4)	21
第18図	1～4号横穴配置図	22

図版目次

- 図版 1 上 調査地点空中写真
下 調査区全景
- 図版 2 上 横穴完掘状況
下 1号横穴閉塞石出土状況
- 図版 3 上 2号横穴閉塞石出土状況
下 3号横穴閉塞石出土状況
- 図版 4 上 4号横穴閉塞石出土状況
下 4号横穴礫床出土状況
- 図版 5 上 雑木伐採風景
中 重機稼働風景
下 調査風景
- 図版 6 上 1号横穴完掘状況
中 2号横穴完掘状況
下 3号横穴完掘状況
- 図版 7 上 4号横穴完掘状況
中 Aトレンチ完掘状況
下 カマド袖検出状況
- 図版 8 出土土器 (1)
- 図版 9 出土土器 (2)
- 図版10 出土土器 (3)
- 図版11 出土土器 (4)
- 図版12 出土土器 (5)、出土鉄製品・装身具



遺跡地名

1. 新田横穴群
2. 南坪横穴群
3. 大谷横穴群
4. 上山古墳群
5. 居村古墳群
6. 山麓山横穴
7. 宇洞ヶ谷横穴
8. 堀ノ内横穴群 (D-1号)
9. 堀ノ内横穴群
10. 堀ノ内13号墳
11. 山脇横穴群
12. 前山横穴群
13. 向山横穴群
14. 本村横穴群E群
15. 本村横穴群A群
16. 本村横穴群B群
17. 岡津横穴群A群
18. 岡津横穴群B群
19. 土橋横穴群
20. 甚佐ヶ谷横穴群
21. 堂前横穴群
22. 楠ヶ谷横穴群
23. 古戦横穴群
24. 宮坂横穴群
25. 長福寺古墳群
26. 峯横穴群
27. 別所横穴群
28. 天段古墳群
29. 鯛原横穴群
30. 岩谷横穴群
31. 三十八坪横穴群A群
32. 原横穴群
33. 西谷田横穴群
34. 梅ヶ谷横穴群
35. 平塚古墳
36. 小高古墳
37. 石ヶ谷古墳群
38. 美人ヶ谷古墳群

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に到る経緯と調査の目的

新田横穴群が所在する市内曾我地区は、国道1号線、東名高速道路、東海道新幹線などの主要交通網が貫縦する市内中心部に近接してはいるものの、今日でも茶園をはじめとする田園風景がよく残されている地域である。また、古墳時代後期には大谷代・本村横穴群をはじめとする大規模な横穴群が造営された、遠江でも有数の横穴周蜜地帯で、谷部に分け入れれば開口した横穴を見ることができ緑豊かな中に古の風情が感じられる地域でもある。

未だ大規模な開発の影響を受けていない茶園を中心とした田園風景は、昭和30年代頃より茶増産としてにわかに活況を呈し、それは新たな茶園造成に結び付いた。その造成に際しては横穴群を包蔵する斜面地を削平する機会が多いことから、結果として横穴群が調査されずに消滅してしまうという事態が相次いだ。未だ埋蔵文化財に対する周知化以前の理解に乏しい時代でもあったが、研究者の間では大横穴群の存在が流布していった時代でもあった。

近年、埋蔵文化財の行政側の周知化とともに、市民の埋蔵文化財に対する理解が浸透しつつある。このような埋蔵文化財包蔵地での農地造成の事前連絡があることは、未だ徹底とまではいかないが、理解浸透の一つの尺度として評価されよう。

今回は、平成6年7月、曾我地区の新田横穴群が所在する斜面地を農地に造成したいとの連絡を受け、平成7年度補助金事業として横穴の基数、遺存状況を確認するための確認調査を実施した。その結果を受け、平成8年度補助金事業として記録保存を目的とした本調査が実施された。

2. 調査の方法と経過

平成7年度の確認調査の結果、4基の横穴の存在が確認されたが、天井崩落による完全埋没した横穴の存在も想定された。

平成8年度、この4基+ α の横穴を調査対象とした。調査域の雑木を伐採し、横穴確認後精査作業、各横穴の調査に入った。また、斜面裾部において遺物包含層と思われる堆積層を確認したため、調査可能な範囲にトレンチを設定し遺物・遺構の有無を確認した。

横穴の実測は、横穴の奥壁中央と玄門中央を結ぶラインを主軸とし、50cm方眼を設定して行った。

現地での図面作成は、横穴は10分の1、その他の遺構は10分の1と20分の1縮尺を併用した。

写真撮影には、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリバーサルを用いた。

現地調査完了時にラジコンヘリコプターによる調査区全体の空中写真撮影を行った。

調査経過は以下のとおりである。

平成7年度確認調査

平成7年11月5日～7日 雑木伐採

11月9日～15日 重機による表土掘削

11月16日～25日 人力による確認作業

平成8年度本調査

平成8年10月11日 コンテナハウス設置、器材搬入

10月12・13日 雑木伐採

10月14日～17日 横穴確認作業・BM移動

10月18日～11月29日 1～5号横穴掘削作業

11月30日～12月15日 1～5号横穴実測作業・写真撮影

12月16日～18日 排土搬出

12月19日～23日 A・Bトレンチ掘削

平成9年1月10日～17日 土層断面実測・カマド実測作業・写真撮影

平成9年1月18日～21日 トレンチ埋め戻し・横穴覆土洗浄

1月22日 ラジコンヘリコプターによる写真撮影

1月23日 現地撤収

2月13日～15日 基準点・水準点測量

3. 遺跡をめぐる環境

1) 地理的環境

掛川市は原野谷川、逆川をはじめとする中小河川により形成された、沖積平野がいくつも広がっている。その沖積平野の端には、枝状に開析された小谷が無数にしかも複雑に入り込んでいる。これら開析谷の山斜面に、当該地域の古墳時代後期を代表する横穴が数多く構築されている。

今回報告する新田横穴群は、市内南東から南西部を貫流する逆川流域の右岸に位置する。逆川流域でも新田横穴群周辺では、小笠丘陵が北へ迫り出し、入りくんだ小谷が形成され、そこに多くの横穴分布をみることができる。

新田横穴群の位置する丘陵は、小笠丘陵から直接続くものではなく独立した比較的小さな丘陵である。丘陵裾の平坦部でのトレンチ調査では、古墳時代以前の旧流路を確認していることから、開析谷形成後も小笠丘陵からの浸食を受けていたことがわかった。このような度重なる浸食によって、複雑な丘陵地形が形成されていったのであろう。

2) 歴史的環境

近年の調査件数の増加に伴い、古墳時代後期の横穴式石室、横穴の確認件数も増加傾向にある。そこでここでは、近年の成果を盛り込みながら市内の横穴を中心に後期古墳の分布を概観してみたい。

市内における横穴式石室は、圧倒的な横穴主流地域にあってその数は20基にも満たない。平成8年に小笠山北麓の丘陵上より7世紀後半代の横穴式石室3基が調査されたが、基本的分布域は旧来の指摘どおり各流域の上流域、すなわち横穴の南部に対して相対的に北部に限られるようである。

さて、近年注目されるのは、逆川左岸に展開する横穴群である。特に宇洞ヶ谷・山麓山横穴の

首長墓横穴が集中する谷部において、平成3年から4年にかけて、木芯粘土室構造の堀ノ内13号墳、金銅製馬具を副葬する堀ノ内横穴群（D-1号）が相次いで調査された。いずれも6世紀後半代の築造で、副葬品においても飾大刀や金銅製馬具を含んでいることから「王家の谷」と呼ぶにふさわし古墳群であることが判明した。

逆川をやや南下した長谷地区では、平成8年に調査された、6世紀前半代に遡る向山横穴群の存在あげられる。従来より古式の横穴の存在が注目されていた地域にあることから、遠江の横穴導入、普及を考えるうえで今後ますます注目される地域と言えよう。

6世紀中葉段階の横穴は、長谷地区に限られず原野谷川中流域右岸にある土橋横穴群にもみられ、遠江の横穴導入が6世紀前半代に遡るとすれば、6世紀中葉には周辺域へ普及していったと考えられ、今後、基数は少ないものの各地で6世紀中葉、すなわち当該地への普及初段階の横穴が発見されることが予測される。

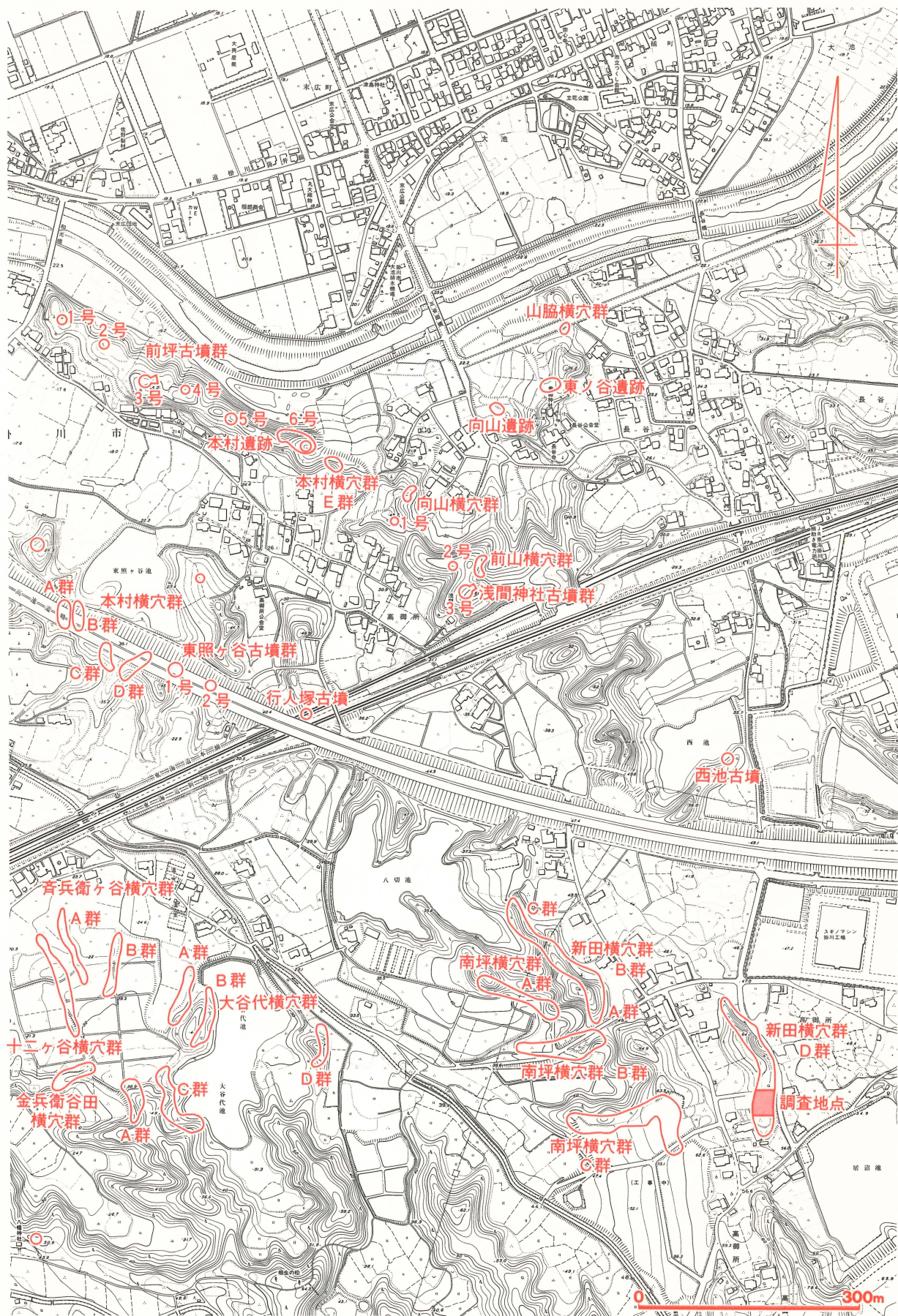
垂木川流域は、左岸に遠江屈指の大横穴群である飛鳥横穴群が存在し、右岸は別所横穴群などにみられる数基単位程度の小横穴群が展開するのみと考えられていたが、峯横穴群では平成3年に12基調査され、総数では30基程の中規模の横穴群であることが判明した。

倉真川流域においてもその右岸に展開する横穴群は、小規模なものと考えられていたが、原横穴群では平成7年に11基が調査され、破壊されたものを含めると20基程の峯横穴群同様、中規模横穴群である。また副葬品は幸い盗掘を免れていたことにもよるが、量、質ともに豊富で土器類の他に大刀・馬具・金銅製品も含まれていた。

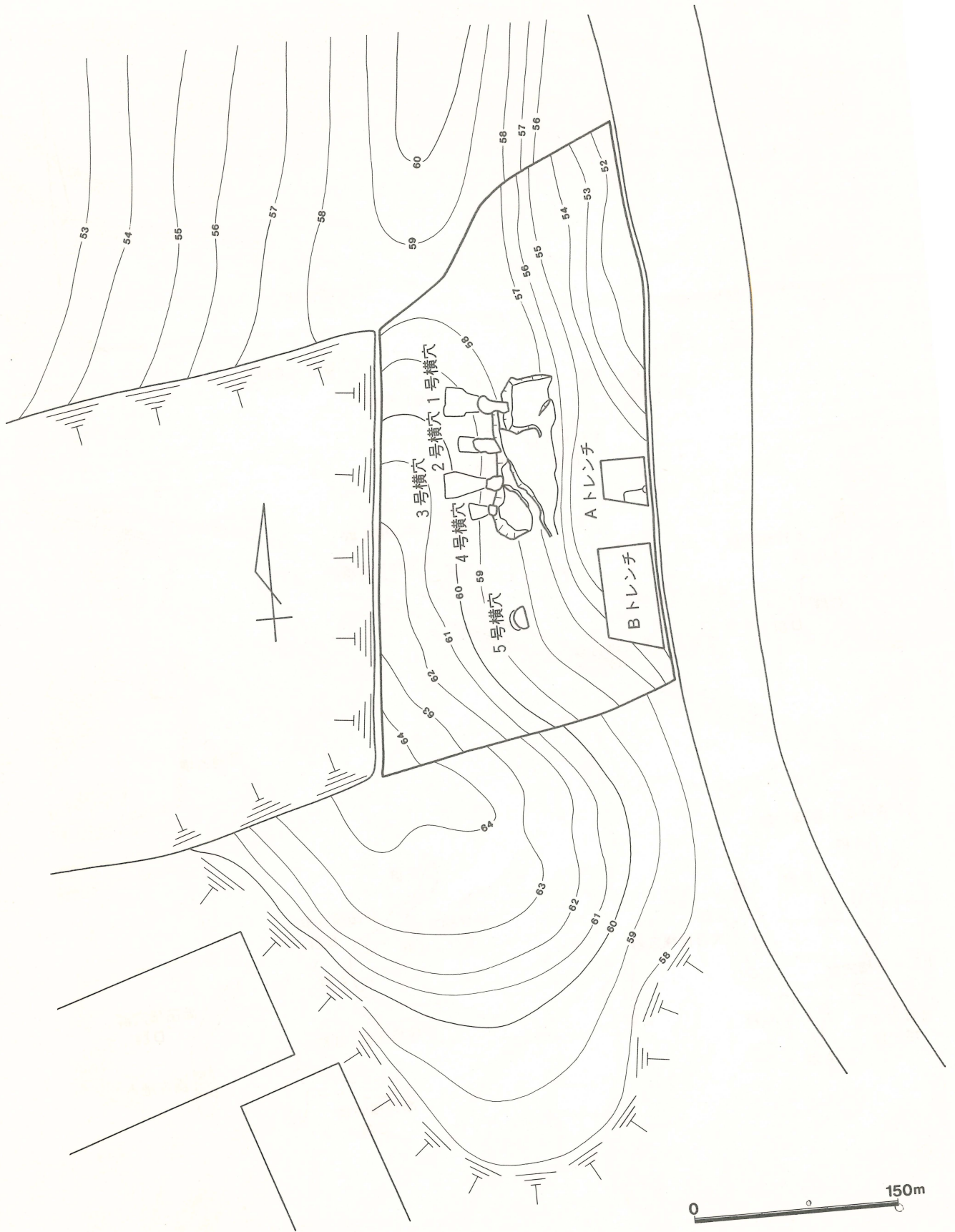
峯・原横穴群ともに調査段階で新たに発見された横穴群で、横穴の天井崩落や谷部の埋没によって完全に埋没していた横穴群である。今後このような新たな中規模横穴群が発見される可能性が高く、飛鳥・曾我・本郷地区の大規模横穴群を中心とした基本的横穴分布は変わらないものの、中小規模横穴群の分布を含めた版図は書き換えられていくだろう。

《参考文献》

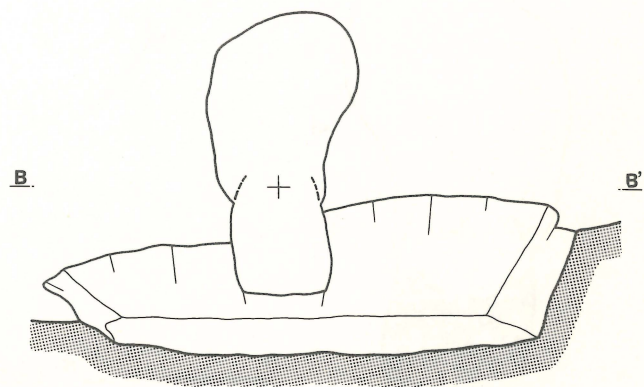
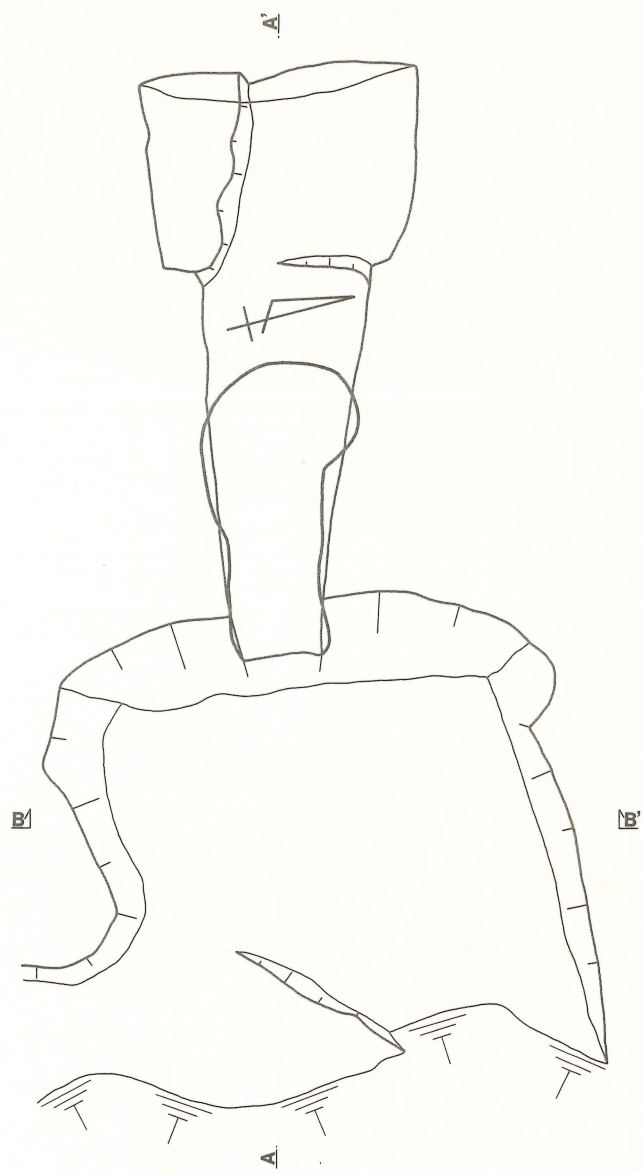
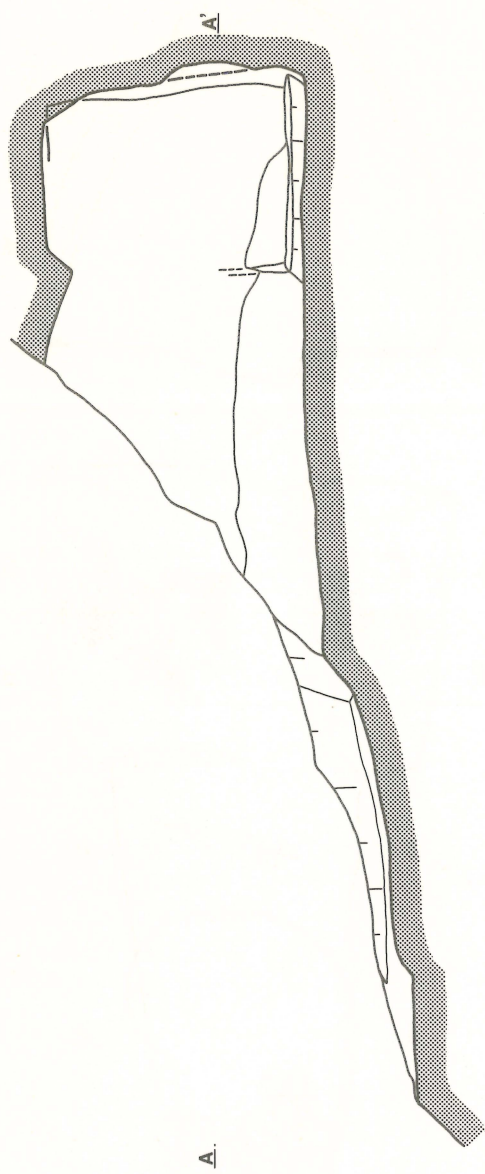
- 平野吾郎 「原野谷川流域の古墳群」『古代探叢』 早稲田大学出版会 1980
- 前田庄一 「曾我造一族の墓所？発見－堀ノ内古墳群」『静岡県の原像をさぐる！』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992
- 静岡県教育委員会 『掛川市宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告書』 1970
- 静岡県教育委員会 『遠江の横穴群』 1983
- 掛川市教育委員会 『三十八坪横穴群A群』 1988
- 掛川市教育委員会 『天段古墳・東沢遺跡』 1989
- 掛川市教育委員会 『土橋横穴群・長沢遺跡』 1991



第2図 遺跡の周辺地形図

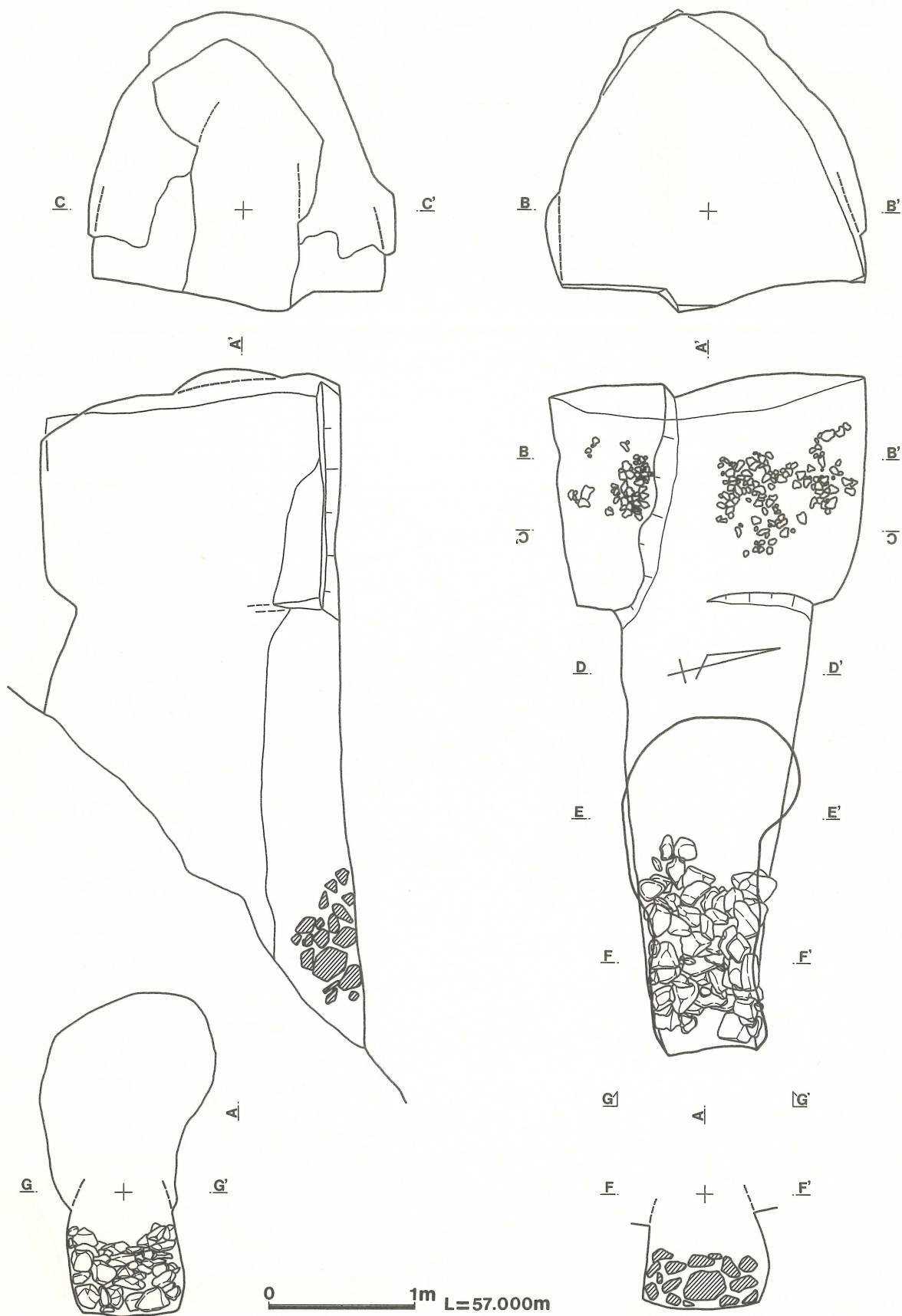


第3図 遺構全体図



0 ————— 2m L=57.000m

第4图 1号横穴实测图(1)



第5图 1号横穴实测图(2)

II 遺 構

1. 横穴

第1号横穴（第4～6図）

本来は単独の墓前域を有し、2～4号横穴に先だって築造された横穴である。天井崩落による多量の流入土が充満していた。閉塞石の一部は遺存していたものの、玄室内は攪乱、盗掘されていた。

開口部の標高56.1m、主軸方位N—75° 30'—Wを測る。

横穴の平面形態は両袖を有す平入りで、断面形は天井・側壁の大半が崩落しているため明瞭でないが、玄室部ではおそらく尖頭形を呈すものと思われる。

閉塞施設は床面から高さ40cm、主軸方向120cmの範囲で確認された。長径20cm大の河原石を小口積みになっている。上部は乱れ、羨道側に崩落している。

羨道は全長3.06m、最大幅（玄門）1.36m、開口部0.6mを測る。開口部に向かって緩やかに傾斜している。

玄室の平面形は台形を呈し、全長1.57m、最大幅（奥壁）2.18m、玄門1.77mを測る。床面は粘板層と砂岩層から成る互層による段差がある。礫床に使われたと考えられる小礫が散乱した状態で確認された。

奥壁は尖頭形を呈し、床面より内湾気味に天井に至るもので、高さ2.03mを測る。側壁は30cm程が遺存するのみで、全体に遺存状態は悪い。

墓前域は、裾部が削平されているが、平面方形を呈すものである。全長3.24m、幅約4m、高さ0.6mを測る。前端部に向かって緩やかに傾斜し、その比高差は45cmである。床面横断は中央部がやや深くなっている。排水を考慮したものであろうか。

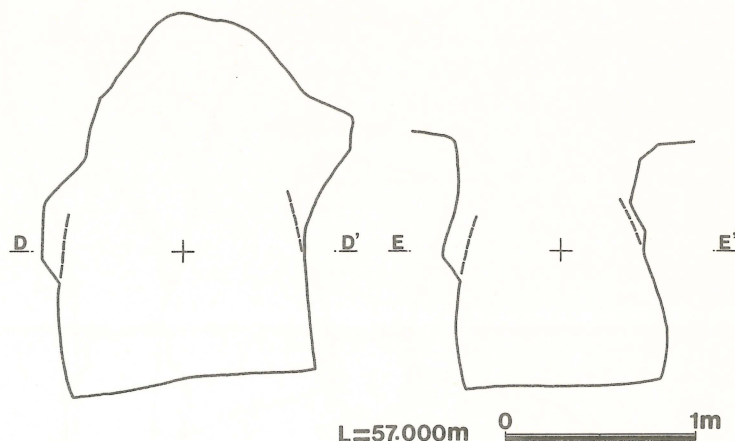
出土遺物は須恵器坏身（1・2）、須恵器長頸壺（3）破片が、いずれも閉塞石の間より出土している。須恵器坏身の年代より7世紀後半と判断されるが、攪乱のため築造期のものか、追葬期のものかは不明である。

2号横穴（第7～9図）

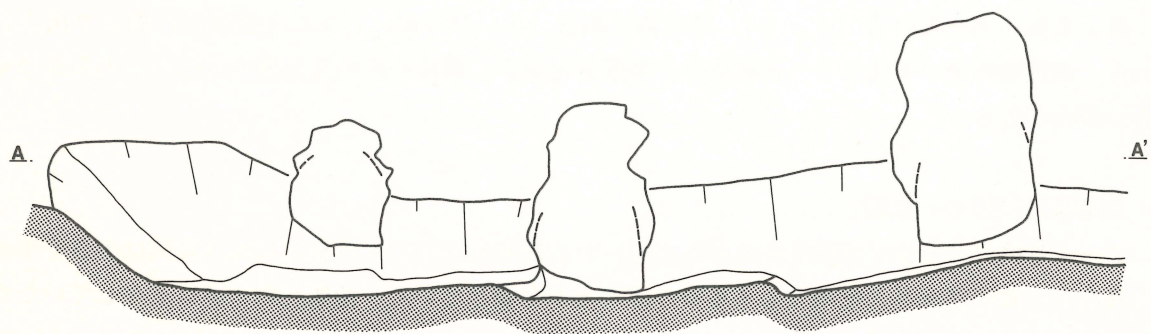
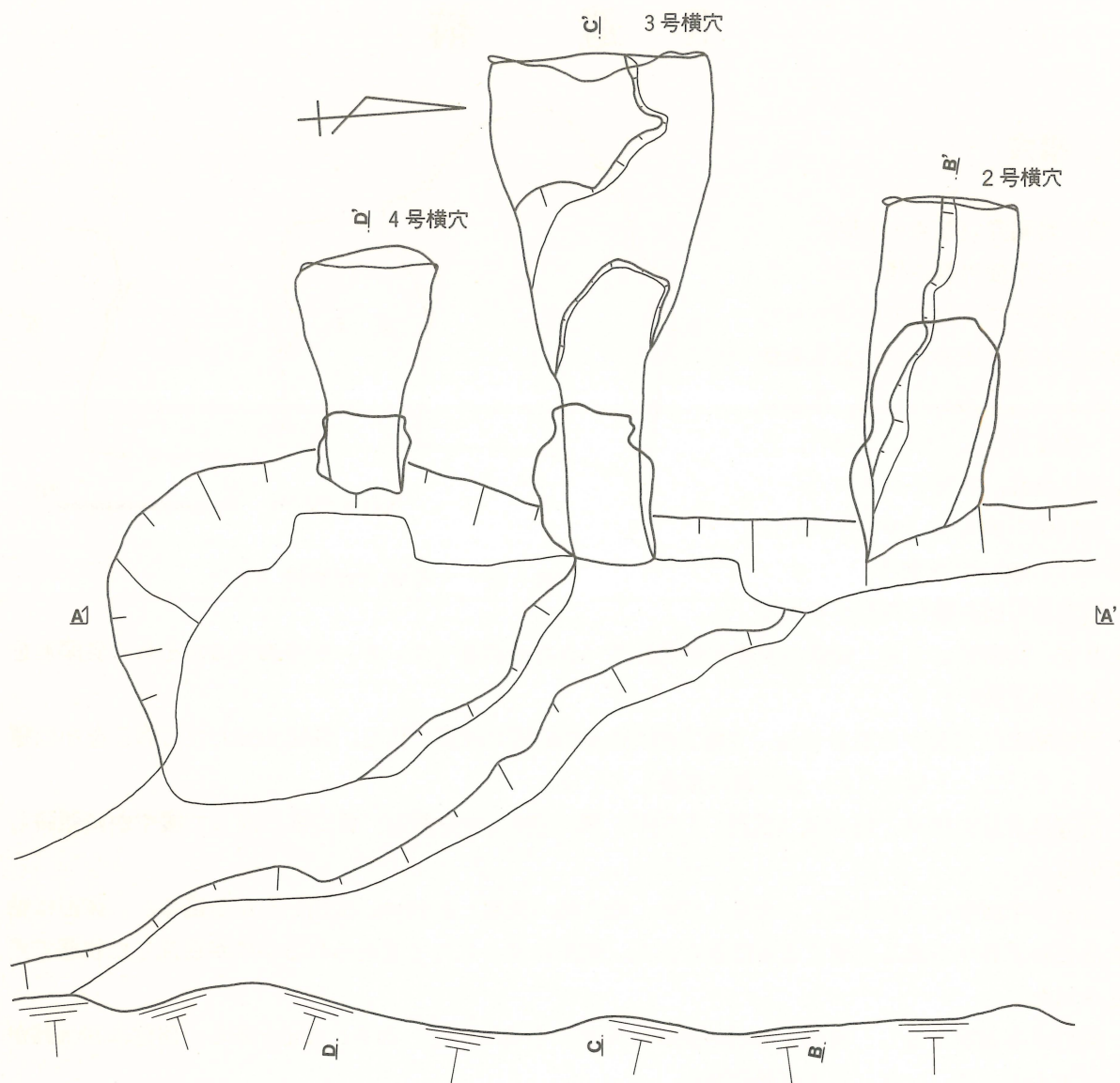
2～4号横穴の3基で単位群を成すもので、中心的存在である3号横穴に比べ規模は小さく平面形も異なる。開口部天井の崩落による多量の流入土が充満していた。閉塞石の一部は遺存していたが、玄室内は攪乱、盗掘を受けていた。

開口部の標高56.6m、主軸方位N—76° 20'—Wを測る。

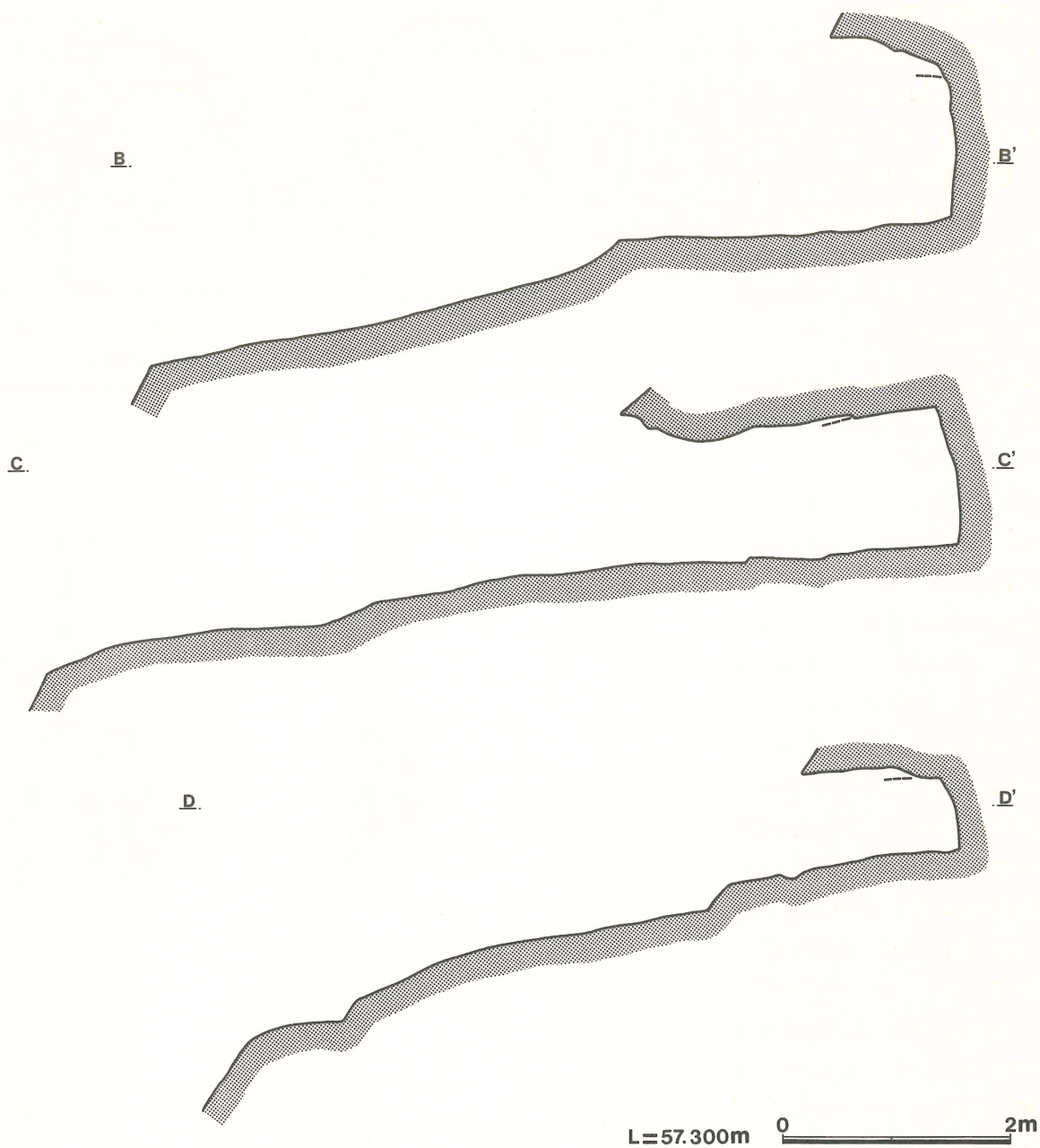
横穴群の平面形態は、羨道と玄室が明瞭に区分されない筒形（長方形）を呈し、断面形はアーチ形を呈す。遺存状況は開口部から天井にかけ崩落が著しく良好なものではない。



第6図 1号横穴実測図（3）



第7图 2~4横穴墓前域实测图(1)



第8図 2～4号横穴墓前域実測図(2)

閉塞施設は床面からの高さ44cm、主軸方向90cmの範囲で確認された。基底部のみが遺存、上部は攪乱されている。長径20cm大の河原石を小口に積み、間に小礫を詰める。

床面には互層(粘板層・砂岩層)による段差ある。

奥壁はアーチ形を呈し、やや内湾気味に立上り、推定高1.2mを測る。天井・側壁は開口部にいくにしたがって崩落が著しい。

墓前域は3・4号横穴と共有するもので、全長4.7m、幅7.85m、高さ1mを測る。Aトレンチの層序からみて裾部はそれほど崩壊していないと考えられる。互層による段差が見られるが、本来は平坦であったろう。傾斜は比較的急峻で、比高差1m前後を測る。

出土遺物は須恵器坏身(4)破片のみであるが、7世紀中葉に比定されよう。

3号横穴（第10図）

単位群内の中央に位置し、規模も大きい。開口部標高56.2m、主軸方位N—85° 00'—Wを測る。他の横穴に比べ流入土は少なく、閉塞施設の遺存状態も良好であった。盗掘による攪乱を受けてはいるものの、他の横穴に比べ被害は少ない。

横穴平面形態は袖が明瞭でないが、妻入り形態で、断面形はアーチ形を呈す。

開口部付近の天井が崩落する他は、奥壁・側壁の遺存状況は比較的良好である。

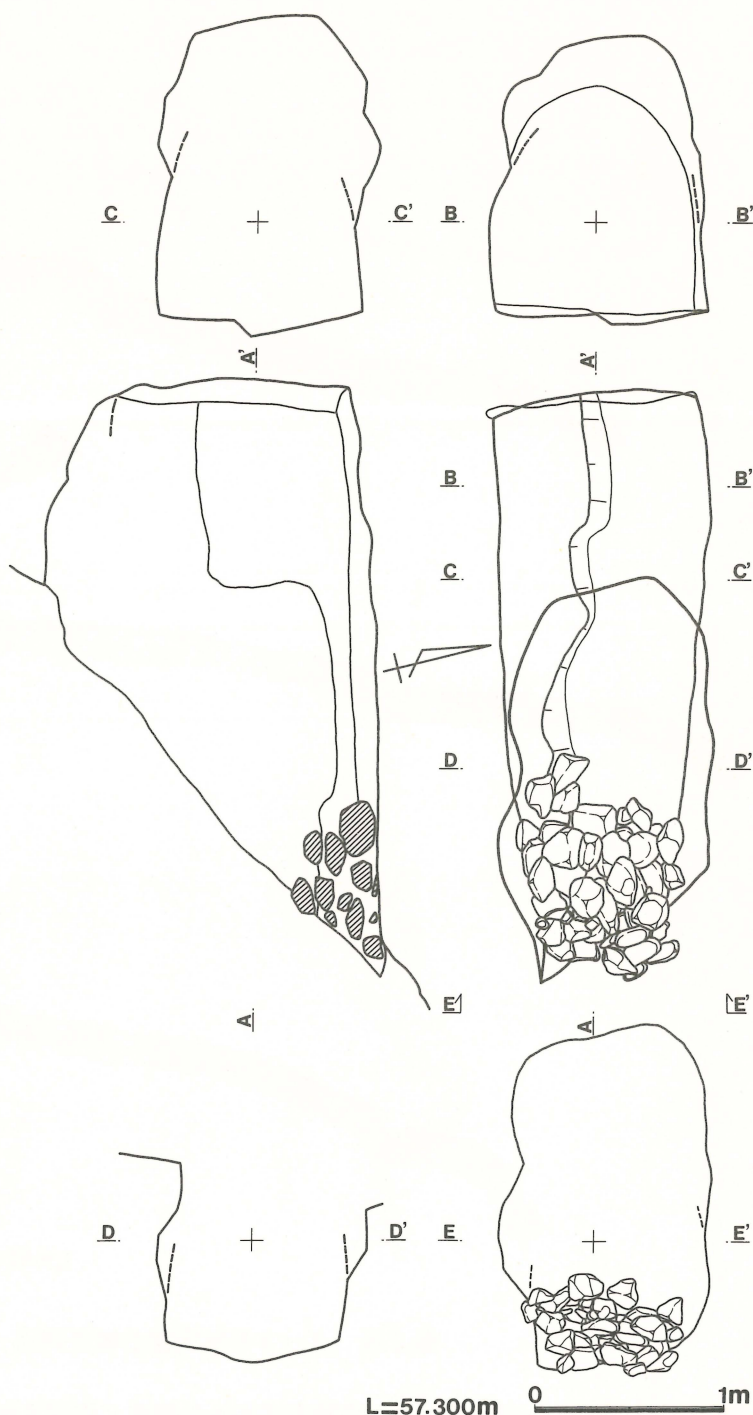
閉塞施設は床面からの高さ60cm、主軸方向2mの範囲に確認された。長径40~50cm大の河原石を根石とし、その上部に長径20cm大のものを小口に積む。根石を含めほとんどの石は盗掘時に攪乱を受けている。

羨道は全長1.67m、玄門幅0.78m、開口部幅0.64mを測り、開口部に向かって緩やかに傾斜する。玄室は奥壁に最大幅を有す羽子板形を呈し、全長4m、最大幅（奥壁）1.8mを測る。

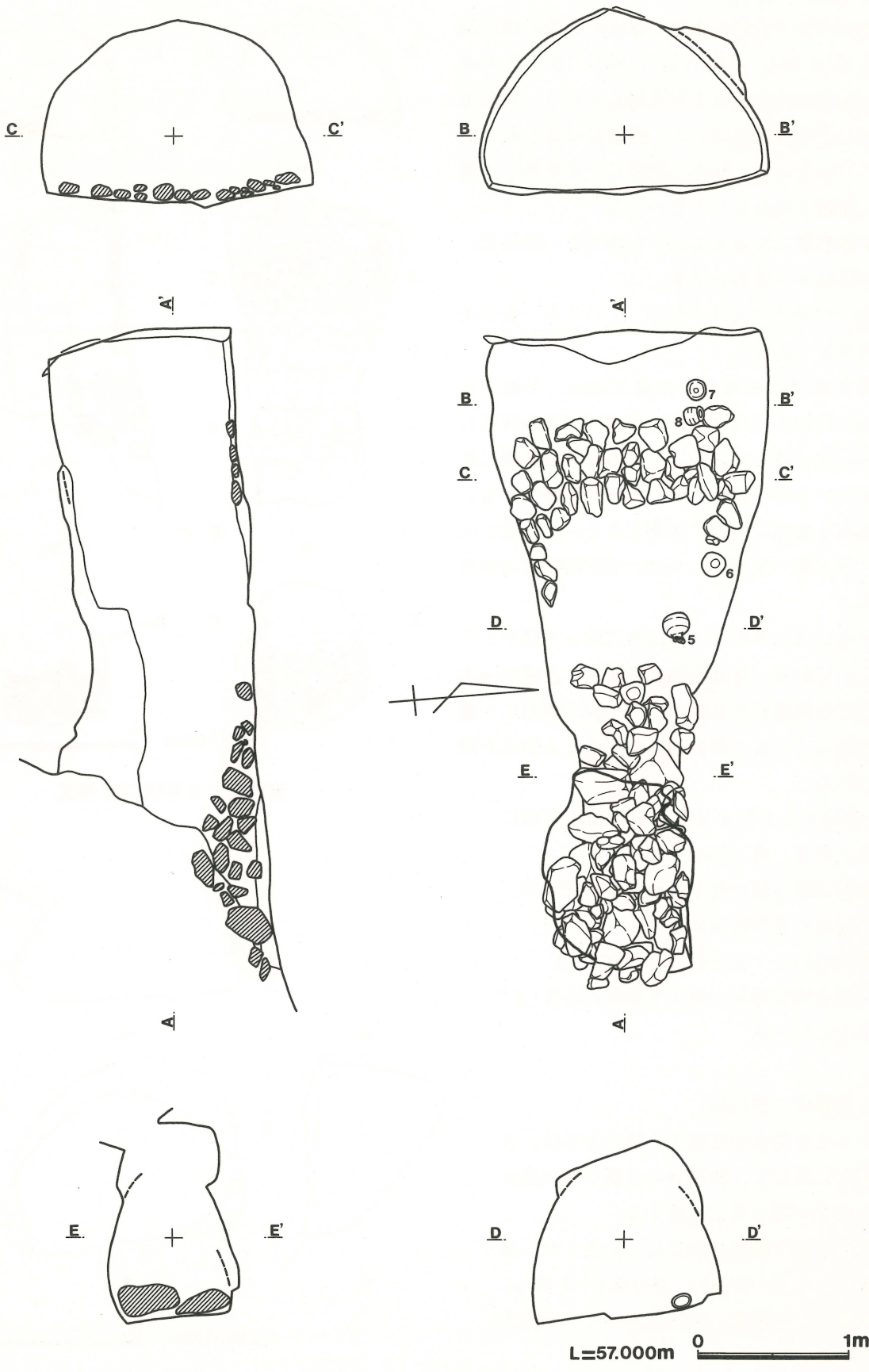
床面は互層による段差があるが、本来は開口部に向かって緩やかに傾斜するものであろう。長径20cm大の比較的扁平な石が玄室中央部に一段敷設されている。

奥壁はアーチ形であるが、最高部(1.2m)に陵が認められやや内湾気味に立上る。側壁は開口部付近では崩落がみられるが、比較的遺存状態は良好で特に奥壁付近では奥から開口部へ向って幅10cm程の鋏先状工具痕が確認できる。

出土遺物は須恵器フラスコ壺(5)、平瓶(6)、土師器脚付碗(8)・蓋(7)、鉄族・刀子・耳環が玄室内より出土している。土師器脚付碗と蓋は類例が知られていないが、赤彩、暗文などの調整技法はいわゆる畿内系暗文土器の系譜が考えられ、遠江の古墳・横穴への副葬としては遠江須恵器編年IV期後半の遺物と共判することから、7世紀後半に比定されよう。



第9図 2号横穴実測図



第10图 3号横穴实测图

4号横穴 (第11図)

単位群内では最も小型の横穴である。開口部の標高56.6m、主軸方位N—83° 20'—Wを測る。横穴内には流入土が充満しており、閉塞施設の上部が攪乱されていた。副葬品はほとんど出土していないことから、閉塞石上部を外して侵入、盗掘されたものと思われる。

平面形態は羨道と玄室が明瞭でない筒形で、断面形はアーチ形を呈す。

開口部周辺の天井は崩落しているが、他は比較的良好である。

閉塞施設は床面からの高さ50cm、主軸方向80cmの範囲に確認された。長径20cm大の河原石を小口状に積んでおり、上部の石は玄室側に転落しているが、遺存状態は比較的良好である。

羨道と玄室は明瞭に区別できない。全長2.08m、最大幅(奥壁)1.18m、開口部幅0.6mを測る。

床面はほぼ平坦で、開口部に向かって緩やかに傾斜しており、比高差28cmを測る。長径10cm大の扁平な河原石を奥壁から70cm程の範囲に一重に敷設している。部分的に盗掘による攪乱が認められる。

奥壁はアーチ形を呈し、やや内湾気味に立ち上がる。高さ66cmを測る。

側壁は開口部付近では崩落が目立つが、奥壁周辺の遺存状態は良い。

墓前域は2・3号横穴と共有する。

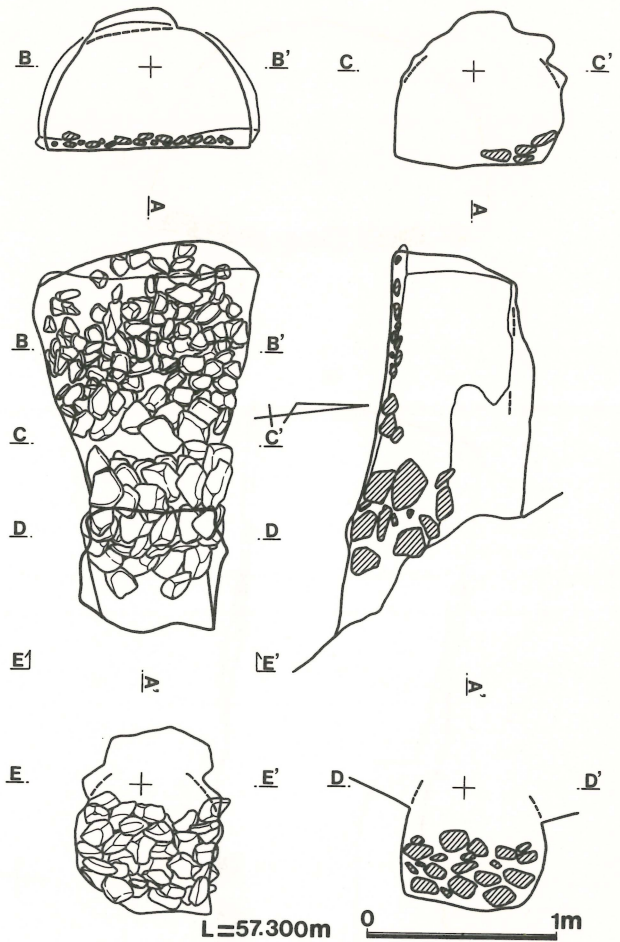
出土遺物は礫床の間より鉄鏃の茎片(8)が出土している。

5号横穴 (第12図)

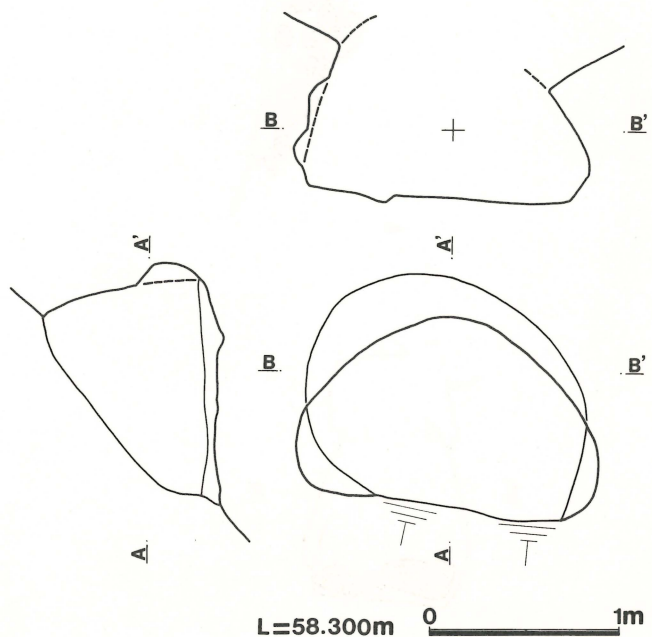
1～4号横穴が位置する部分からは、8m程南に位置し、標高58mを測り他の横穴群とは2m程上位に占地する。

平面形は不製円形を呈し、全長1m、最大幅1.6m、高さ0.96m(遺存部分)を測る。天井開口部は崩落、床端部もいくらか流失している。

床面には起伏が少々見られるが、著しい



第11図 4号横穴実測図

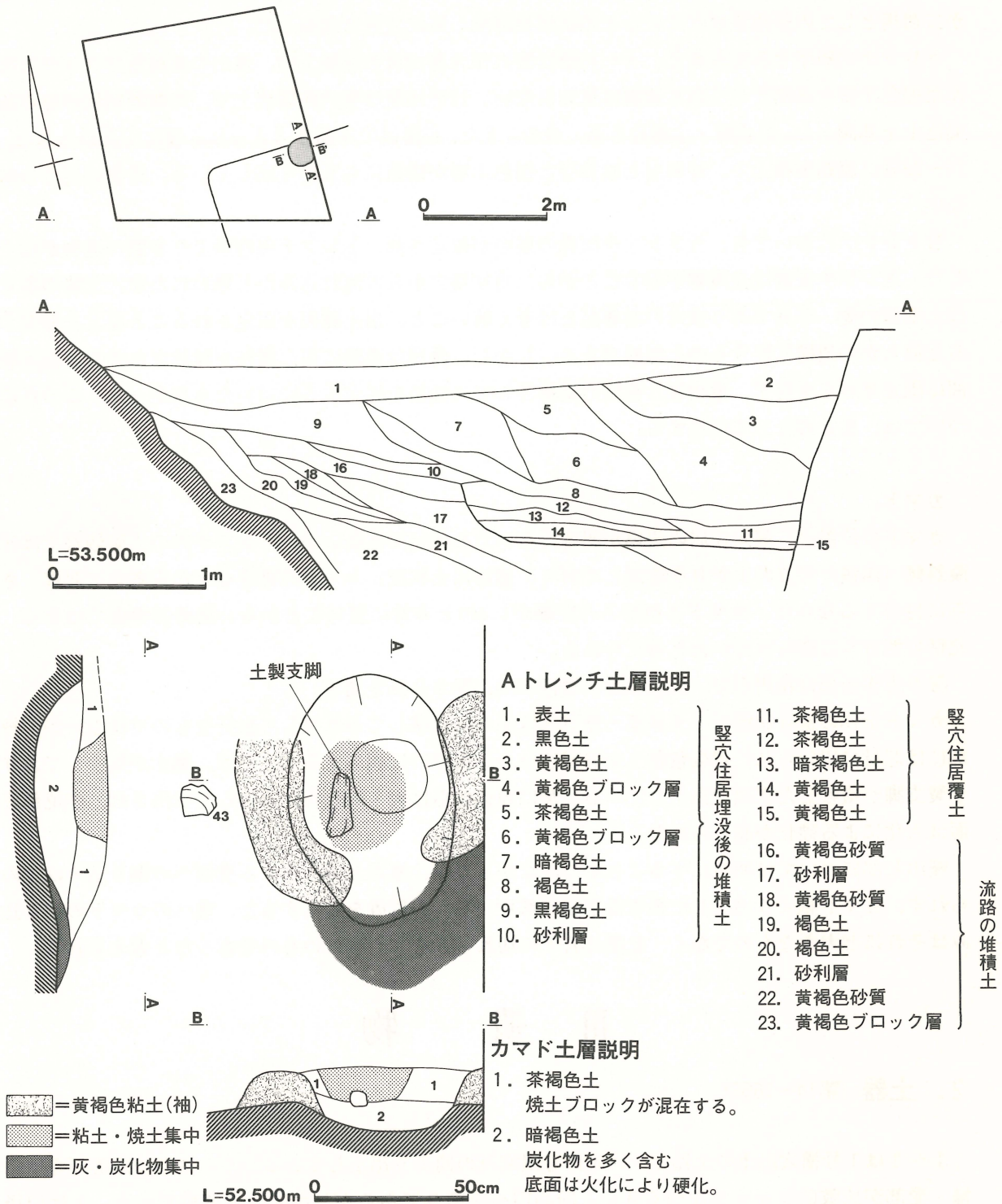


第12図 5号横穴実測図

傾斜はなくほぼ平坦である。

出土遺物は本遺構に帰属するものではないが、嶺田式の壺型土器口縁部片（45）が出土している。上方からの流れ込みであろう。

明らかに、古墳時代後期の横穴墓とは形態・構造を異にするものであるが、造営時期・性格の具体相については不明である。



第13図 A トレンチ土層断面図・カマド実測図

2. 竪穴住居（カマド）（第13図）

Aトレンチにて検出された竪穴住居跡とカマドである。

トレンチ調査のため竪穴住居の規模は不明で、竪穴の壁も明瞭でなく、トレンチ土層観察によって崩落した立ち上がりを確認できる程度である。しかし、トレンチ南東隅に遺物が集中しており、土層観察においても遺物包含層は限定されること、カマドと考えられる焼土範囲が確認されたこと、明らかに遺構としての様相を呈すことなどの状況を勘案し竪穴住居と判断した。

トレンチの層序をみると、1～10層は竪穴住居埋没後の堆積土で、地山の黄褐色ブロックを含んだ褐色土層を基調としており遺物は見られない。11～15層は竪穴住居覆土で、比較的粘性のある茶褐色土を基調とし、炭化物・土器片を多く含む。また、15層はで床面と考えられる硬化が認められた。16～23層は流路堆積土で、砂利層と砂質層と褐色土層が幾重にも互層を成している。遺物は認められない。

Bトレンチにおいても、Aトレンチ同様の層序が確認され、トレンチ南西隅より多数の遺物が出土した。トレンチ東側は丘陵裾が迫ることから、当初横穴からの流れ込みかと思われたが、土器の多くは土師器の甕・坏身であり横穴の副葬品とは考え難いこと、出土範囲が限定されることなどを勘案すると何らかの遺構に伴うものと判断できる。しかし、西側は道路に面し電柱が埋設されており掘削範囲は限定せざるを得ず、遺物包含範囲の遺構としての性格を確定するにはいたらなかった。この点については、まとめとして後述する。

カマド

カマドの位置は、竪穴住居の規模が明確でないため断定できないが、トレンチ内の土層観察では丘陵斜側（西側）で立ち上がりを確認しており、遺物出土状況、カマドの構造などから考えて北壁、さらに付言するならば、カマドと西壁との距離が1.4mと非常に短いことから、北壁の中央ではなく、北壁の西寄りに造られていたと考えられる。

掘り方平面形は楕円形で、長径80cm、短径55cm、深さ8cmを測る。

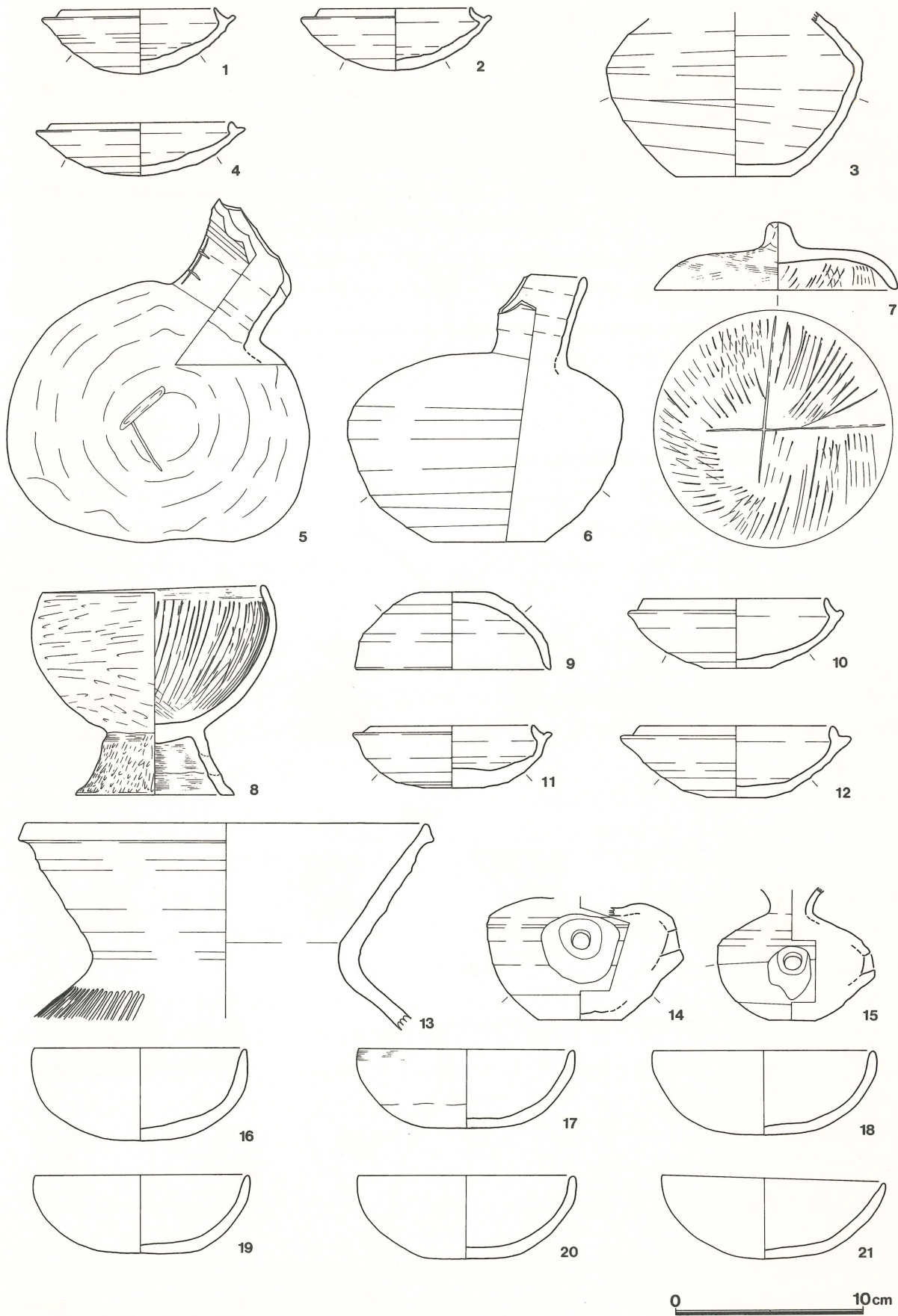
カマド全体の遺存状態は、天井部・煙道部は完全に崩壊しており決して良好なものではないが、袖部には芯材に用いられた黄褐色粘土が確認された。掛け口に相当する部分では、焼土が集中しており土製支脚が横転した状態で出土している。焚口周辺からは灰・炭化物が集中して検出され、燃焼部底面は火化による硬化が認められた。

煙出し部については明確にすることができなかったが、煙道と考えられる壁面への掘り込みは認められず、カマド脇より出土した須恵器平瓶底部片（43）の位置を勘案すると、壁へのカマドの切り込みはそれほど大きなものでなく、北壁に若干の切れ込みをもつ程度のものであったと考えられる。

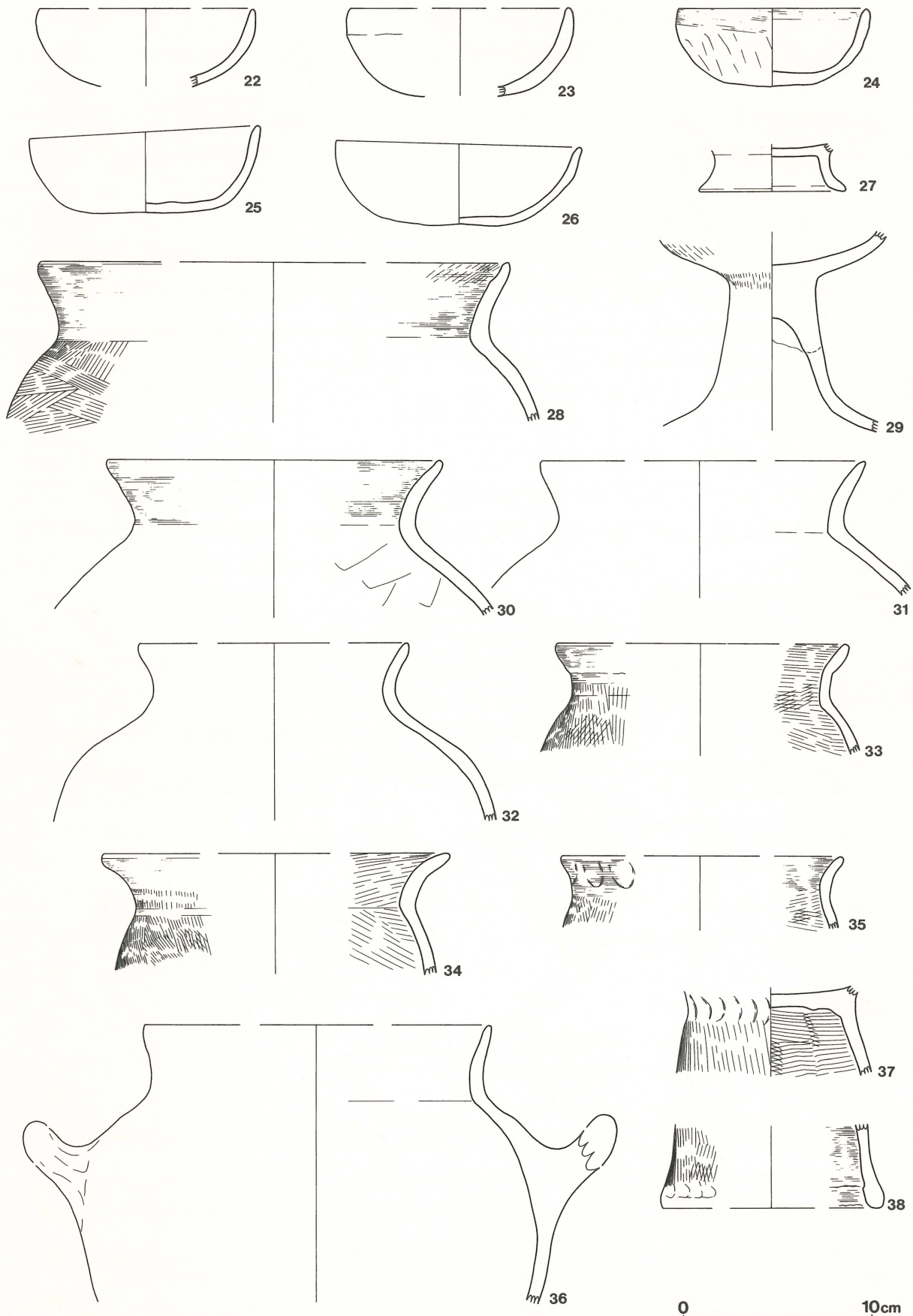
Ⅲ 遺 物

2. 土器（第14～16図）

1～3は1号横穴出土の土器で、いずれも閉塞石の間より出土している。1・2の須恵器坏身は口縁・受部が比較的シャープなつくりで、同心円ヘラ削りであるが、底部は未調整である。1は口径9.4cm、器高3.5cm、2は口径9.3cm、器高3.3cmをそれぞれ計る。1の底部には「+」のヘラ印がある。



第14图 出土遺物実測図(1)



第15图 出土遗物实测图(2)

3は須恵器長頸壺で、頸部から口縁部を欠損している。

4は2号横穴出土の須恵器坏身片で、推定口径10.4cm、器高2.8cmを計る。やや扁平で口縁・受部は肥厚している。

5～8は3号横穴出土の土器である。5は須恵器フラスコ壺で、口縁部は人為的に敲打されている。肩部から胴部にかけては焼け歪みが著しく、いたるところに火膨れがみられる。頸部には「井」のヘラ印がある。胴部にもヘラ状工具による沈線がみられる。

6は須恵器平瓶で口縁部は人為的に敲打されている。

7と8はセット関係の土師器脚付碗とその蓋である。7の蓋は口径12.8cm 器高3.6cmを計る。乳頭状の取っ手が付き、内外面ともに赤彩が施される。外面にはミガキ調整前の細かいハケ目が確認できる。内面には放射暗文割付用(?)の「十」字状の暗文と、放射状の暗文が施される。

8の脚付碗は口径11.7cm、底径7.0cm、器高11.3cmを計る。碗部は口縁部まで含め半球体状を呈す。脚端部はやや広がる。外面は非常に丁寧にミガキが施され、脚部内面以外は赤彩が施される。碗部内面には放射状の暗文が施される。

9～42はBトレンチ出土の土器である。9は須恵器坏蓋で、口径10.2cm、器高4.15cmを計る。天井部から口縁部まで緩やかに内湾するドーム形を呈し、螺旋状ヘラ削りがみられる。

10～12は須恵器坏身で、いずれも受部は小さく肥厚しており、何れも同心円ヘラ削りがみられる。計測値は、10は口径10.8cm 器高3.75cm、11は口径9.7cm 器高3.4cm、12は口径11.2cm 器高3.85cmをそれぞれ計る。

13は須恵器甕口縁部片で、推定口径21.2cmを計り、口縁は直線的に立上り、口唇部を折返す。

14・15は須恵器甕で、14は体部径10.2cm、現存高6.5cmを計る。口縁部から頸部欠損。肩部には焼け歪みがある。15は8.0cm、現存高7.2cmを計る。偏球体の体部と細い頸部から成るが、口縁部を欠損。

16～26は土師器坏である。口径9.9～12.9cm、器高4.2～4.6cmを計り、器高には著しい差はないが、口径は11cm大のものが多く、ほとんど器面風化が著しく調整観察はできないが、24は口縁部に横ナデ、体部にヘラ削りが認められる。

27は脚付盤の脚部片で、底径7.4cmを計る。外面は丁寧にナデられている。

29は土師器高坏片で、脚部は比較的長い。

28～35は土師器甕である。胴部破片は多数あるが、図示できたのは口縁から肩部片である。

28～31は口縁の屈曲が弱く直線的に立ち上がる。

28は推定口径24.8cmを計り、口縁内外面は横ナデ、肩部には明瞭なハケが確認できる。台付甕か、壺の可能性はある。

30は推定口径17.6cmを計り、口縁内外面は横ナデが施される。

31は推定口径17.0cmを計り、調整は確認できない。

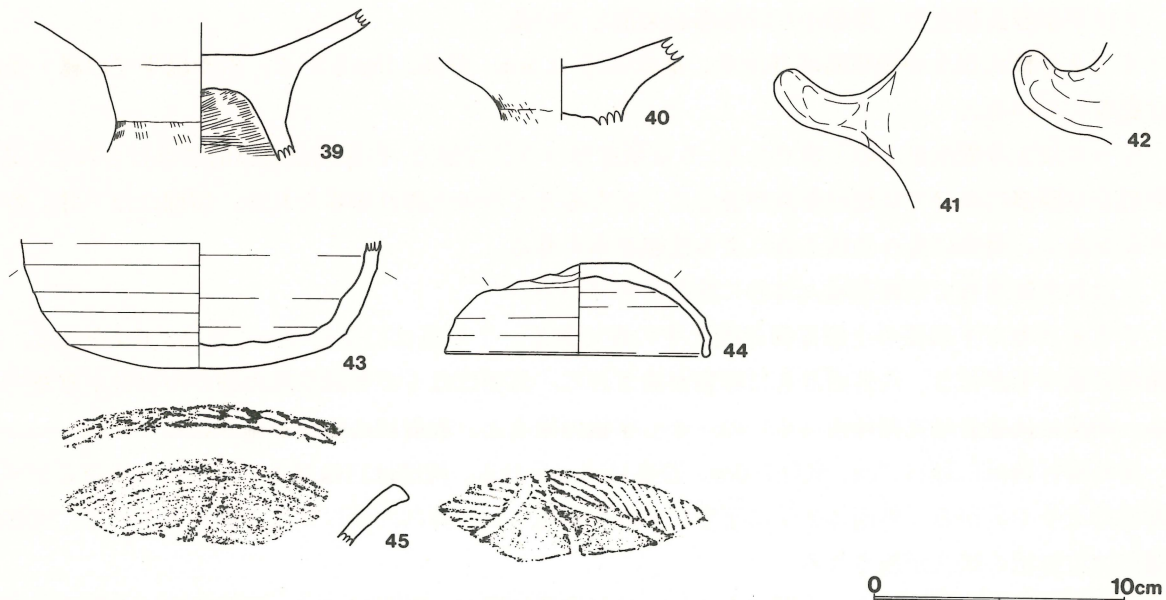
32は推定口径14.2cmを計り、湾曲気味に立ち上がる。

33は推定口径15.2cmを計り、直線的に立ち上がり口縁端部を肥厚させる。口縁外面は横ナデ、他はハケが施される。

34は推定口径18.0cmを計り、屈曲は弱い口縁端部で外反気味に広がる。口縁外面は横ナデ、他はハケが施される。

35は推定口径14.7cm ほとんど屈曲はなく外反して立ち上がる。口縁外面にはナデ調整時の指頭圧痕が認められる。他は内外面ともにハケが認められる。

36は把手付き壺で、推定口径18.3cmを計り、口縁の立上りは外反が弱く直立気味に立上る。肩部に



第16図 出土遺物実測図（3）

把手が付く。

37と38は台付甕の脚台部片である。37は脚台上方に指頭圧痕が認められる。外面縦ハケ、内面横ハケが施される。

38は脚端部が肥厚しており、外面縦ハケ、内面横ナデが施される。

39・40はBトレンチ上層出土の台付甕接合部片である。弥生時代後期から古墳時代前期のものと思われる。

41・42は甕、または甕の把手片である。

43と44はAトレンチ出土の土器である。43は須恵器平瓶底部片で、カマド脇より床面直上で出土している。内面のノタ目は明瞭である。

44は須恵器坏蓋で、推定口径10.2cmを計る。端部は比較的シャープであるが、底部周辺はかなりの歪みがある。

45は5号横穴出土の甕口縁部片である。外面には二枚貝による横位の条痕、内面には二枚貝による斜位の条痕と棒状工具による連弧状の沈線が施される。口唇部は面取りされキザミが施される。

2. 鉄製品・装身具（第17図）

4号横穴出土の8（鉄鏃茎片）以外は、すべて3号横穴出土である。1～4は広銚三角形式の平根鏃である。1の鏃身は平造りで、逆刺として斜に切込む。関には棘が付く。

2は全体に遺存状態は悪く、銚先・茎先端を欠損。逆刺としての切込みは弱い。関には棘が付く。

3の鏃身は平造りで、逆刺として斜に切込む。関には棘が付く。茎尻を欠損。

4の鏃身は平造りで、銚先と端部を欠損。茎がやや変形。逆刺状の切込みはなくフラット。関には棘が付く。

5は三角形式のやや丸味をおびた平根鏃で、鏃身は平造り、篋被は短い。

6は三角形式のやや丸味をおびた平根鏃で、鏃身は平造り。茎尻を欠損。

7は長三角形式の尖根鏃で、鏃身は片丸造り。篋被が長く、関が付く。8は鉄鏃の茎片である。

9は両関の平棟平造りの刀子である。残存長11.3cm、刀身巾1.0~1.4cm、重ね0.4cmを計る。鍔が確認できるが、茎半分を欠損。刀身に歪みがある。

10も両関の平棟平造りの刀子である。残存長9.7cm、刀身巾1.15~1.4cm、重ね0.4cmを計る。茎を欠損、鍔は確認できる。

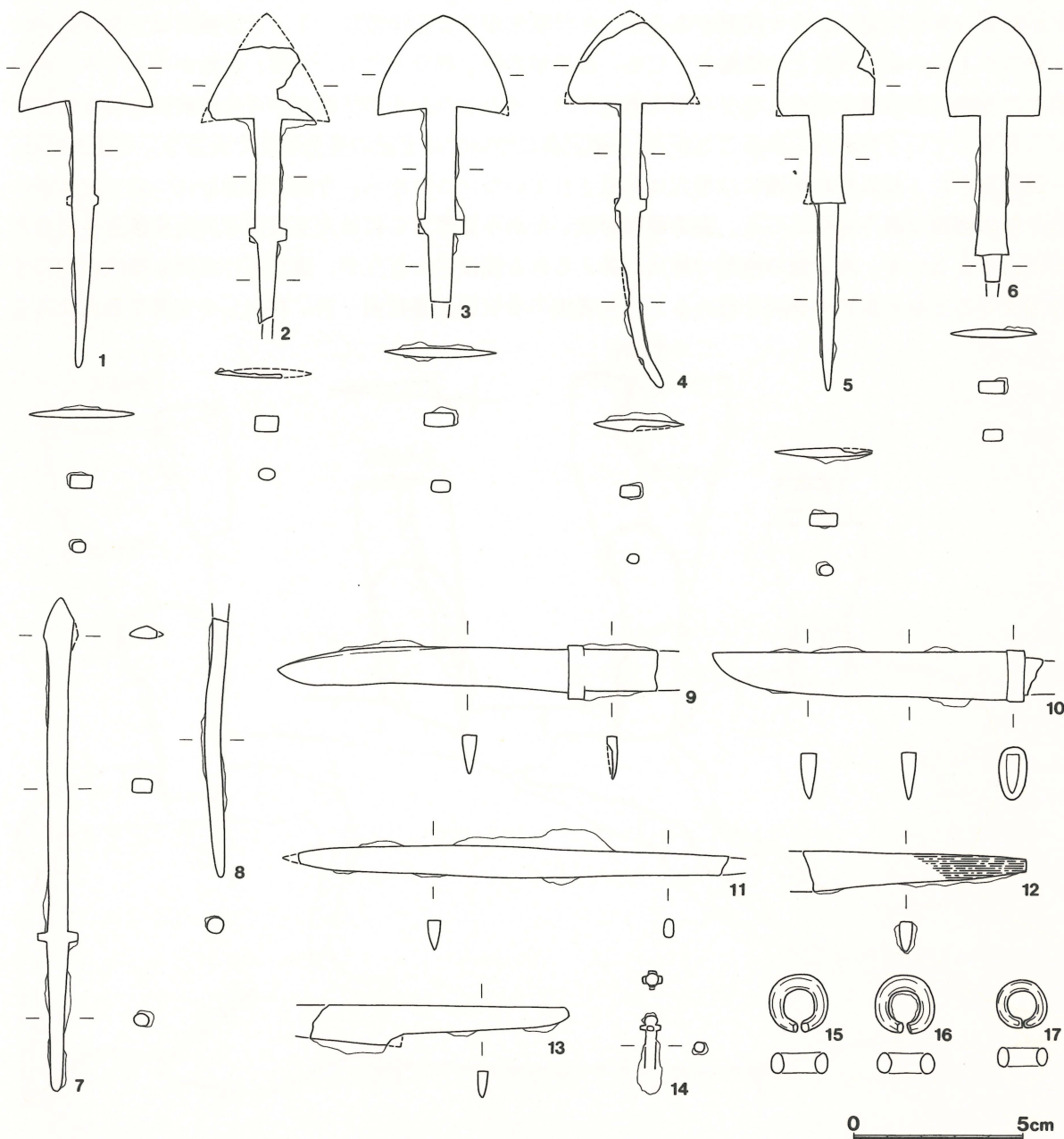
11は平棟平造りの刀子。残存長12.8cm、刀身巾0.7~0.9cm、重ね0.35cmを計る。関は不明瞭で、茎尻を欠損。刀身の状態からもかなり使い込まれている。

12は刀子茎片で、木質が確認できる。

13も刀子茎片で、片関の刀身部より斜めに続く。

14は両頭金具片で、片方の瘤状突起は錆によって確認できない。花卉状座板は4個確認できる。

15~17は銅芯銀貼の耳環である。いずれも銀箔はほとんど剥離、腐食は銅芯に及ぶ。



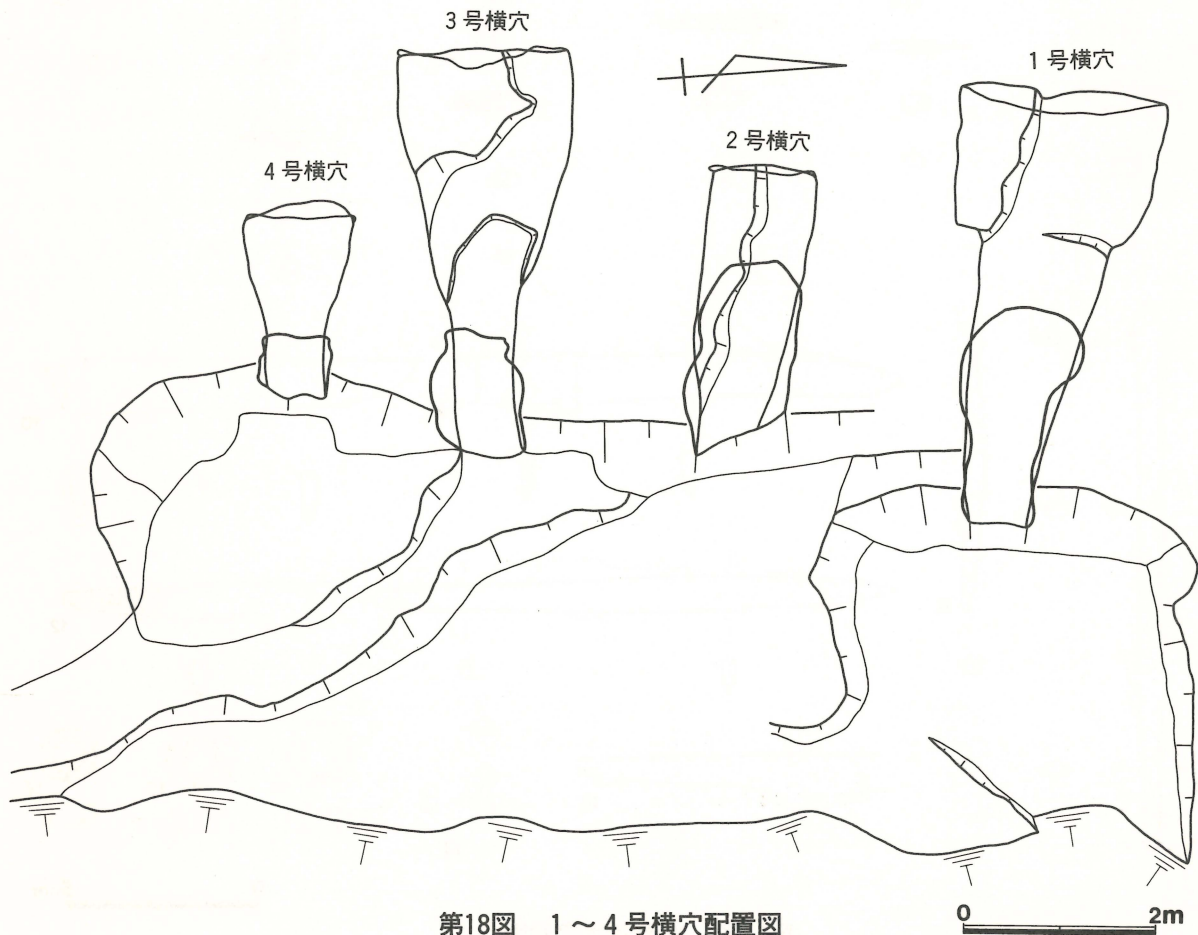
第17図 出土遺物実測図(4)

IV ま と め

横穴群の構造 (第18図)

本横穴群は、丘陵斜面を方形に切り出した墓前域を共有する4基一単位群の横穴群である。厳密には前項で述べたように、1号横穴と、2～4号横穴とは墓前域を異にするものであるが、最終的には墓前域を共有する形になった。それは1号横穴墓前域と、2～4号横穴墓前域との位置関係、平面規模からみても明らかである。出土須恵器の年代観より、IV期前半～IV期後半(遠考研編年)7世紀中葉から後半代の築造と考えられるが、1号横穴が単独墓前域をもつ横穴として最初に築造され、その後ある程度の時間をおき1号横穴の墓前域が埋没した段階で3号横穴と墓前域、続いて2・4号横穴が築造されていった結果と考えられよう。ただし、出土遺物から年代を考えると、破片遺物であることから築造年代比定には少々問題があるが、2号横穴が7世紀中葉に、1・3号横穴は7世紀後半に比定され上記の築造順位とは齟齬が生じる。岡津横穴群B群などでも、規模、占地からみて中心的な横穴の周囲に墓前域を共有しながら順次築造され、そのような小単位群がさらに墓前域を切り合いながら共有していく例がみられることから、当横穴群については上記の築造順位で大過ないと思われる。

調査された4基以外に周囲には横穴は発見されていないことから、今回の調査分については4基一単位群の認識で誤りはなかろう。調査範囲が狭いため小支群さらには大支群などの上位構造を含めた検討はできないが、同丘陵の南端で横穴と考えられる陥没跡の存在や、調査区の北側も横穴占地に十分適することなど周囲の状況を含めると、同規模の単位群が複数同一谷に存在し小支群を形成するも



第18図 1～4号横穴配置図

のと考えられる。

新田横穴群全体の群構成については、第2図で示された地形上でのA～C群と、D群分けは曖昧である。D群がA～C群とは異なる、明らかに独立した丘陵に占地することからすれば、A～C群とは区別した横穴群として捉えるべきであろう。翻って、丘陵を異にするものの比較的近接した位置関係にある新田・南坪両横穴群（新田横穴群A～C群と南坪横穴群は同一丘陵）は、両横穴群をまとめて大支群として認識すべであろう。

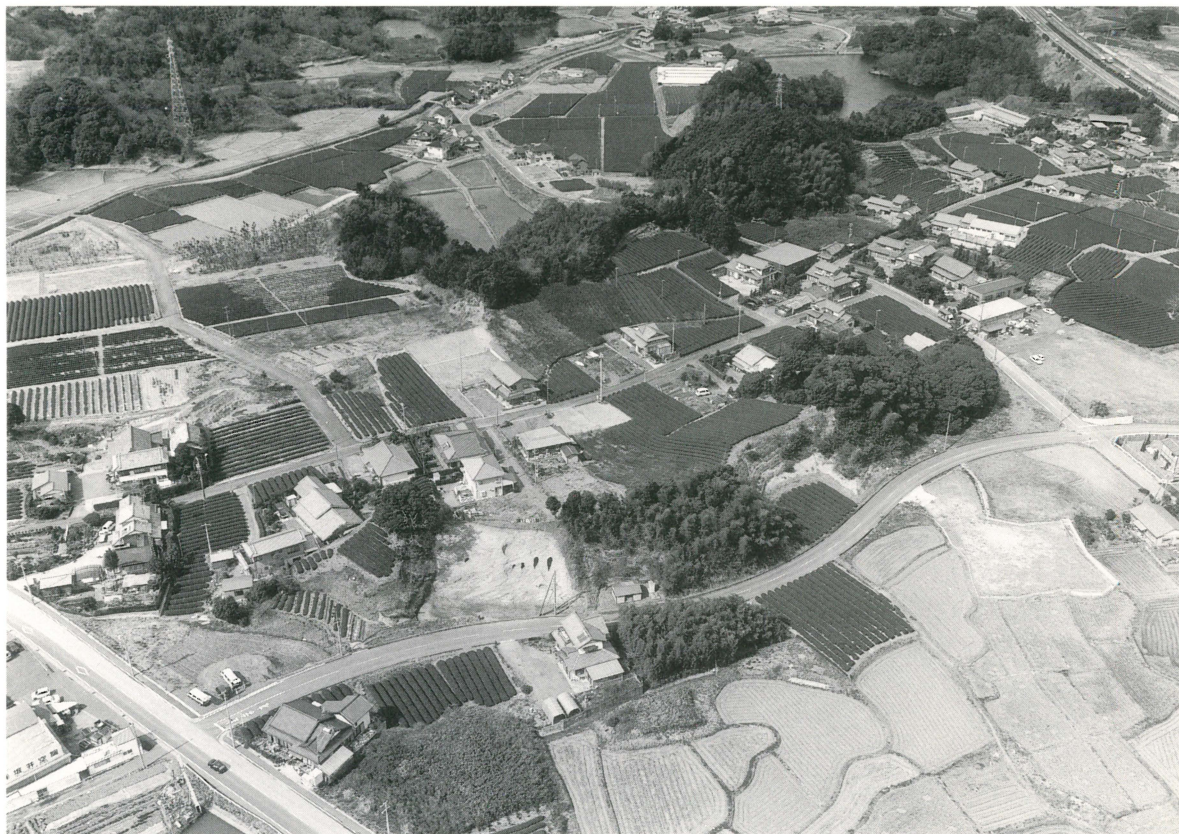
竪穴住居について

横穴群と非常に近接して竪穴住居が発見されたことは、今回の調査での大きな成果であった。トレンチ調査のため、規模、屋内施設など不明な点も多いが、出土遺物からみて時期的に住居と横穴群とが並行する期間があったと考えられることは非常に興味深い。住居が横穴に先行するか否かは不明であるが、概ね7世紀中葉から7世紀後半にかけての追葬を含めた本横穴群の造営期に並行すると考えられる。

竪穴住居を検出したAトレンチよりも多くの遺物を出土したBトレンチについて、出土遺物、並びにその帰属について考えてみたい。Bトレンチ出土の遺物について、遺物包含範囲の遺構としての性格を確定することはできなかったが、出土レベルにそれほど的高低差がないこと、5×3m程の遺構としては、比較的広範囲に集中がみられたこと、カマドの構築材の一部もしくは土製支脚と考えられる土製品も出土していることなどを勘案するとAトレンチ同様竪穴住居内出土遺物であった可能性が高い。

Aトレンチについては、カマドの遺存状態は比較的良好であったものの、住居の規模・平面形については不明な点が多いが、Bトレンチの竪穴住居内出土土器の組成を勘案しながらその性格について考えてみると、須恵器の甕2点を除く坏・甕・壺の土師器類は当該期の一般的な竪穴住居からも出土する雑器である。須恵器甕の竪穴住居出土という希少性のみで当竪穴住居の特殊性を指摘することは無理があるが、須恵器甕の持つ意味は大きいと思われる。また、何よりも横穴群と非常に近接すること、横穴群、竪穴住居の両造営期が平行することからも両者の有機的関係が想定され、少なからず葬送に係わる施設であった可能性の指摘も有効な一考であろう。

圖 版



調査地点空中写真



調査区全景



横穴完掘状况



1号横穴閉塞石出土状况



2号横穴閉塞石出土状況



3号横穴閉塞石出土状況



4号横穴閉塞石出土状況



4号横穴礫床出土状況



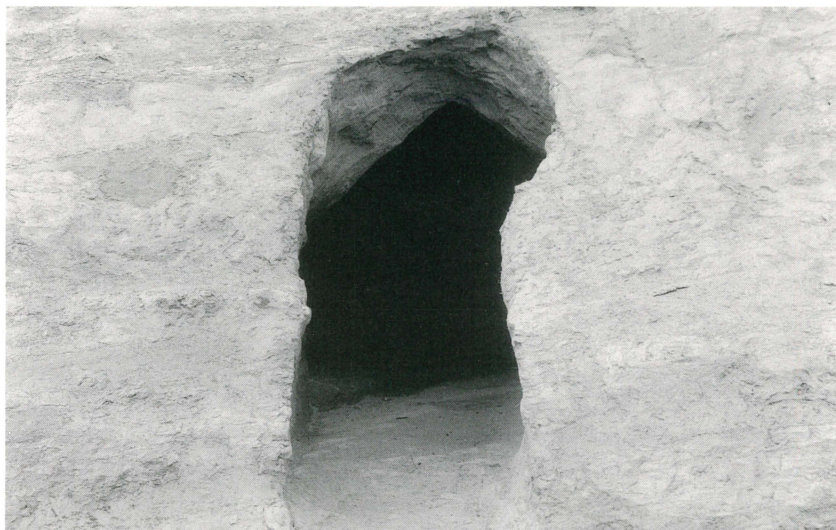
雑木伐採風景



重機稼働風景



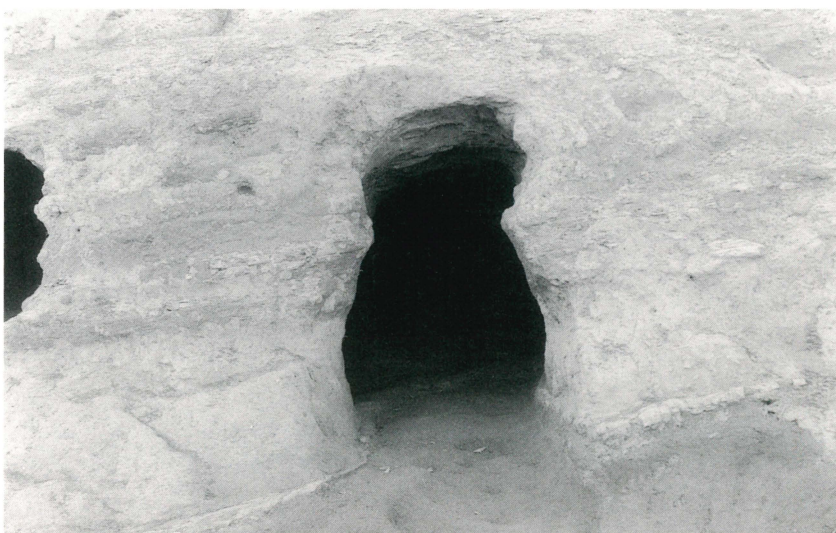
調査風景



1号横穴完掘状况



2号横穴完掘状况



3号横穴完掘状况



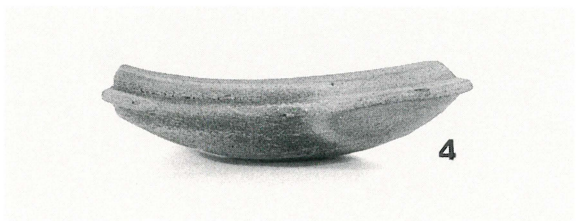
4号横穴完掘状況



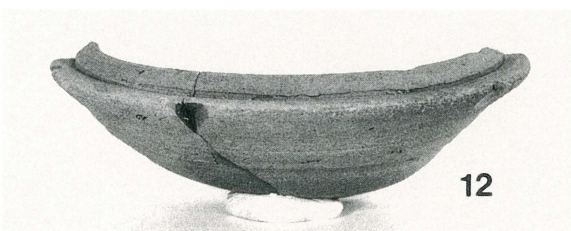
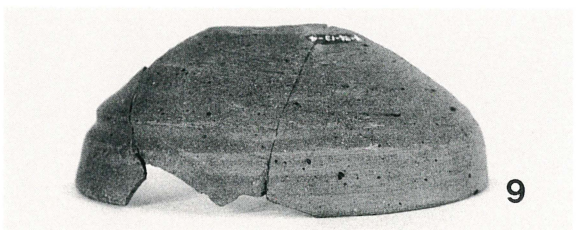
Aトレンチ完掘状況



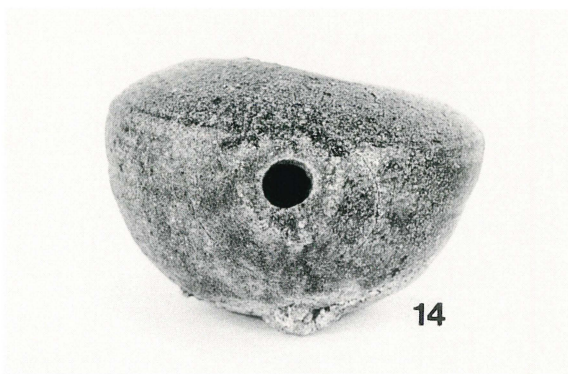
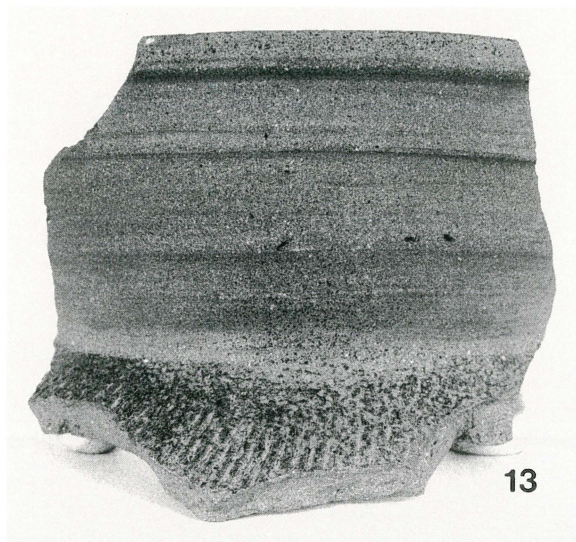
カマド袖検出状況



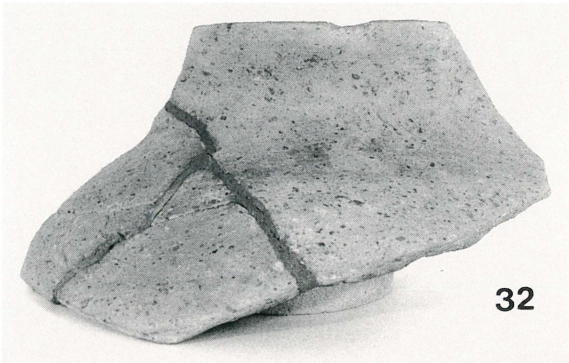
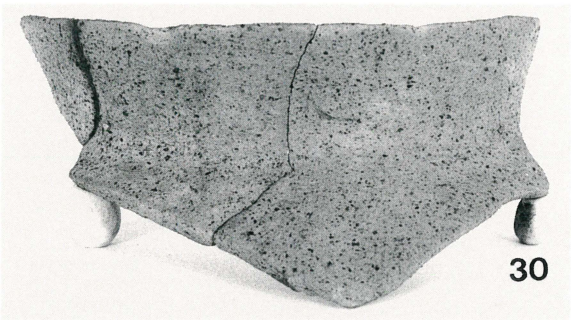
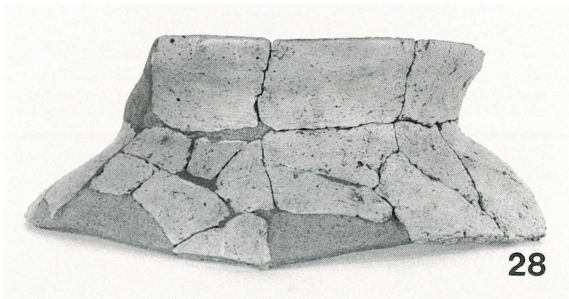
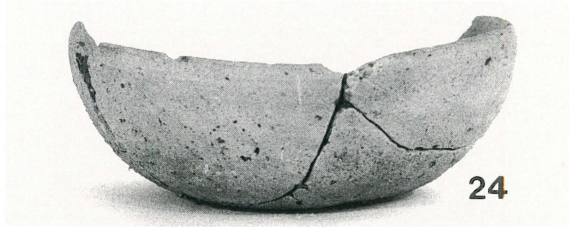
出土土器(1)



出土土器(2)



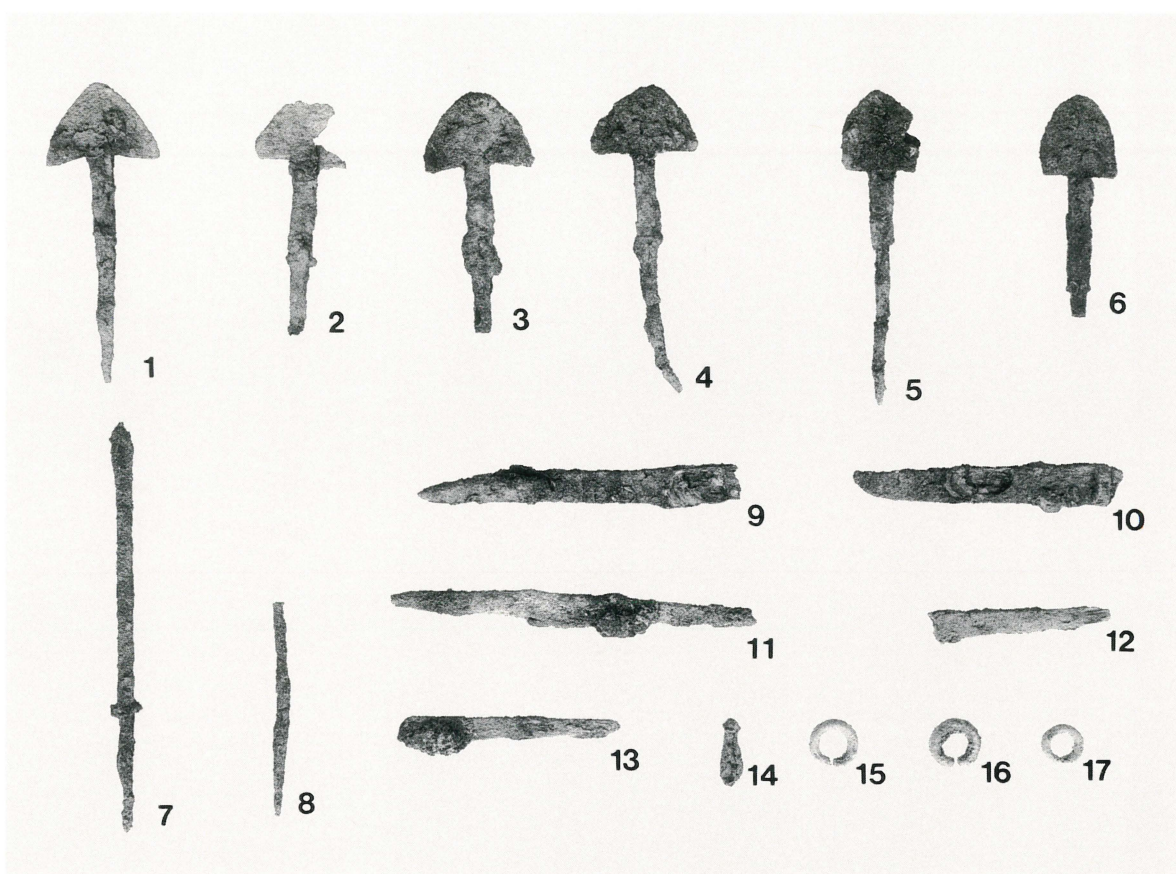
出土土器(3)



出土土器(4)



出土土器 (5)



出土鉄製品・装身具

報告書抄録

ふりがな	しんでんおうけつぐんディーぐん							
書名	新田横穴群D群							
副書名	平成8年度畑地造成に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	戸塚和美							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 掛川市長谷701-1							
発行年月日	平成9年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんでんおうけつぐん 新田横穴群 ディーぐん D群	しずおかけんかけがわし 静岡県掛川市 ながや 長谷	2213	K-74	34度 45分	137 59分	19961011 19970215	500 m ²	畑地造成
所集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新田横穴群 D群	横穴墓	古墳時代後期	横穴4基 竪穴住居跡1軒	土師器 須恵器 鉄鍬 刀子 耳環		横穴群に近接して、造墓並行期の竪穴住居が発見された。		

新田横穴群 D 群

平成 8 年度畑地造成に伴う緊急発掘調査報告書

平成 9 年 3 月 31 日

編集発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1
TEL (0537)21-1158

印刷 株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537)24-0013

